

1-015

1/12/2017

- ・存在が対称性の破れを通し、主-客-分裂を発生させなければ、意識されることがない。
- ・己以外から対象化されることによって己に自意識が発現する。  
だが、存在に自己意識は発生しないのである。己がすべてであり、他は無であるからである。己がすべてであり、他は無いからである。これが絶対的超越性としての「存在」である。
- ・超越性とは悟性の極限にあるものである。そしてその超越性が現存在を、そのものとして存在させるものである。
- ・悟性は自分で意識することのない、世界の写像、射である。
- ・悟性は当然のこととして難破するものであり、難破することの契機により自己の意義を覚知させるところのものである。
- ・悟性の行き着く先、極限が超越性自体そのものであるところの「存在」である。
- ・悟性は主-客-分裂した初段階のものである。そして悟性は「存在している」ことを保障できるものではないのである。
- ・悟性は、己の限界を悟らせるだけであり、そのための存在でもある。悟性は難破させるためにある媒介的存在でもある。
- ・知が難破し、「存在域」に入るための必須なものである。

究極的な知はあり得ない。存在の唯一性、超越性が究極の知となって悟性に顕わになることはあり得ないのである。存在の全一性は暗号としてのみ顕われる。実証主義的な知として客観化され得ない。存在を含む存在を俯瞰できる存在が在ることになり、そこから存在を客観化し定位することは不可能であり、存在が複数あることになり矛盾である。存在を空間化、構造化して階層化して思惟することは矛盾である。

1-016

2/2/2017

悟性、論理、因果性の限界を超えた極限を突き抜けたところからの射出体として、我々の悟性が通用する世界への次元相転移した射出体として、この世界は世界化し、存在化されているのである。存在は究め尽くせない。しかし超越性を捉えるのはこの射出された正にこの世界に具体性として顕現しているこのものである。このものからの様々なアプローチと概念の更新である。我々は限界を超えた極限概念であるところの超越的に自己存立(創出)する超越性から、この眼前の具体性としての我々にとっての正味の糧を得ているのである。それが、我々が生成し、出現して来たところのこの世界のすべてである。

概念は生物学的形式と資質と機能と、存在から見た場合の局限された、偏向された、限定された認識範囲内で構築されたものであり、その概念世界を無思慮に存在に外挿しているという倒錯の世界に入っていることに気付かないのである。

1-017

2/17/2017

生物学的感官の有する位相的形式の交叉と、感官情報のネットワークの臨界から相転移的に創発する概念によって世界一内一存在を我々は捉えている。

あらゆる概念は生物学的(つまり宇宙環境の生成物としての自己組織系有機体)感官の延長線上にある。世界一内一存在のすべてをそれらの概念によって認識しようとする。つまり自己の有限の固有の形式と機能に射影してそれらを所与の認識系統を通じて認識しようとする。認識とは、世界一内一存在のうちの、概念に同調し共振するものを濾過して抽出し、それらの概念で閉じた自己整合的な相関世界を構築しようとすることに他ならない。

数、量、単位による世界の度量衡化、感官からの経時的情報の差分から生まれる時間という概念、視覚、聴覚、という固有の形式から内部で創発され内部で構成されることにより生じる空間概念、次元概念。世界一内一存在との接続手段の他の方法の一つは、検証、観測、演繹、帰納、論理のコンビネーションを駆使した記号論理学による数学的手法である。これも実は生物学的概念の延長線から派生したものではあるが、一種の拡大された感官である。だがしかし、これは生物学的感官の交叉から創発される直観とは、相容れない像を作り出す。

生物学的感官から創発する概念や直観と、その拡大された感官としての記号論理学としての数学化モデルとの協同による互いに交叉する領域において推論、模型、帰納、検証、演繹という方法で世界定位していくのが科学である。特に科学といってもその中枢にある物理学のアプローチである。その典型的な例がプランクによる様々な模型や推論や理論模型の試行錯誤によるプランク定数の発見がそれを如実に物語っている。このプランク定数は、量子力学、量子重力、量子宇宙論、弦理論、・・・あらゆる物理の分野に関係している。

そのアプローチとは全く異なるものとして、現象学的超越による実存意識というものがある。これは世界一内一存在を超越することを目指すものである。科学はあくまでこの超越的実存に奉仕するもので、それ以上ではない。

ニーチェは存在という概念が何故発生するかを問う。生成から、現実には生成以外にない世界からどうして我々人間種の内部に存在という概念が生じるか。

世界定位におけるニーチェの思惟には鋭いものがある。特に”権力への意志”には多くが語られている。生成、存在、直観、認識、遠近法、仮象、科学、形式、世界、宇宙、・・・想像でき得るあらゆる分野に言及している。ニーチェは徹底的に真摯に考え抜いた。そしてニーチェを徹底的に研究し影響を受けたのは、ヤスパースでありハイデッガーであった。彼らは多くのものをニーチェに負うている。そして前人未踏の思惟の深淵を境界と極限を垣間見ていたと思われる。思惟は実践に昇華する。実存は4次元的リアリティの現在において存在を体験する。

無限小、無限大、極小、極大、境界、位相、・・・自己整合的、自己無矛盾な限定概念のなかに押し込められた世界概念のなかで世界一内一存在は生きている。と我々は考えている。しかし、そのように限定し、規定できるものではない。思惟を開放しなければならない。

1-018

2/18/2017

認識とは、世界が有する脱人間的なもの全体を、人間が有する所与の資質から構成できるものに、人間仕様に射影し構成したものである。当然、人間存在に特有な形式に接続できる情報を総合したものである。科学はこの範囲内での相互関係の定式化の作業である。

存在を感知するのは直観であって悟性ではない。この生成のなかから人間の内部に存在という仮想形式が生じる。最も直観的に経験できる身近なものである。そして存在を常に言葉のなかで表現している。存在しているということは存在の志向性の顕れである駆動する自己展開ダイナミズムの生成流のなかにいることである。そして現存在は時間のなか、生成のなかにしか顕れない。

存在と存在物、物質、時空、・・・等の根源的概念はニーチェが発する問い”権力への意志”のなかから再考察すべきものだ。科学を行っても存在を経験することはない。

生成の坩堝に投げ込まれた意識体としての人間。己自身を世界を対象化することによって己の存在位置を確認する。最初に人間がやることは人間を根本的に規定するところの生物学的資質によってその中に入っていき、感官による世界との情報接続である。感官の各々が有する形式によって自らが有する形式に整合するように世界が射影する。その射影像のマトリックスからなる総合から意識は構成される。感官の延長形式、次元としての概念によって己自身にとっての世界像の総合的構築を行う。

己が有する形式、次元とこの生成する世界との接続する形式、次元によって世界を対象化する。

概念による世界の定位により、数、量の度量衡的概念をパラメータとしてもつ数学が生まれる。度量衡的概念による世界定位が生まれる。

だが、悟性、数学による世界定位は存在を捉えない。表層としての世界表象の相対関係、因果関係を描写、記述するのみである。

それらを推し進めた限界に無知の淵が空いている。そのことを識るためにはそれらも必要なのであろう。

人間は数学という新しい感官を、拡大された感官を創り出したのである。感官がすべてそうであるように、世界が感官の形式、次元に射影したものであり本質的には曖昧なものである。感官から創出された概念を素材とした従前の感官とは異なる、感官からは距離をおくところの謂わば抽象的な感官、位相的な感官である。

ニーチェ。”権力への意志”から。

624. 世界が算定され得るということ、すべての生起が公式で表現され得るということ——これは真に「とらえる」ということであろうか？音楽で算定され簡約され得るすべてのものが算定されたとしても、いったい何がその音楽で捉えられているのであろうか？それゆえ、ついでは、「恒常な原因」、事物、実体、何か「無制約的なもの」。それらが仮構されたとしても——何が達成されたのか？
625. 「運動」の機械論的概念は、すでに、原本的事象が「視覚」と「触覚」の記号へと翻訳されたものである。……十全な表現法を要求することは背理である。たんなる相対関係しか表現しないということが、言語の表現手段の本質のうちにはあるからである。真理という概念は不合理である。「真—偽」の全領域は、本質間の相対関係のみ連関するのであって、「それ自体のもの」に連関するのではない。……「本質自体」なるものはなく、相対関係がはじめて本質を構成するのである。これは「認識自体」があり得ないのと同じである。
627. ……要するに、因果性を信ぜざるをえなくさせる心理学的強要は、意図をもたない生起を表象しえないことのうちにある。
628. 私たちが数学的公式を生起したものに当てはめ得れば、何ものかが認識されているというのは幻想である。すなわち、それは表示され、記述されているに過ぎない。それだけのことである！
634. 法則というものはない。あらゆる権力がいずれの瞬間にもおのれの最後の帰結を引き出しているからである。別様ではあり得ないということ。算定の可能性はまさしくこのことに基づいている。……作用から成るこの世界を、可視的な世界—視覚にとっての世界—のうちへと翻訳してくれるのが、「運動」という概念である。……運動論としての力学はすでに人間の感官言語への翻訳である。
635. 私たちは、計算し得るためには「単位」を必要とする。それだからとて、そうした単位が在ると想定してはならない。私たちは単位という概念を私たちの「自我」概念—私たちの最古の信仰箇条から借用してきた。私たちが己を単位と見做さなかったら、私たちは決して「事物」という概念を形成しなかったであろう。……機械的世界は感官の先入見と心理学的先入見とをその前提としているのである。

機械論的世界は、視覚と触覚とだけが世界を表象する(運動せしめられたものとして)とおりに、空想されている、——だからこの世界は算定され得るのであり、——だから、その結果があくまで恒常である原因としての単位が、「事物」(アトム)が、虚構されている。(—虚偽の主観概念のアトム概念への翻訳)

それゆえ現象的に存在しているのは、数概念の、事物概念(主観概念)の、活動概念(原因であることと結果を引き起こす働きとの分離)の、運動概念の混入である。すなわち、私たちは相変わらず、私たちの視覚を、私たちの心理学を、そのうちへと持ち込んでいるのである。

2-001

9/10/2016

我々は空間の中に居るわけではない。空間概念としての内、外、境界は悟性の認識形式であり、実際はそれらとはとり合えずの暫定的な表象の仕方ではある。

空間も存在の一つの表象である。それらの概念が意味を成さないところの存在の超越的形式に包含されているのである。計測的、度量衡的概念も相対的相関をとりあえず暫定的に表象しているのである。

存在はそれらの表象概念によって認識できるものではない。我々の脳が機能として有する認識形式、機能的能力が描いている世界像なのである。

存在はそれらの制約され、限定された概念で捉えられるものではない。人間の有する認識形式と其中で発現する諸概念を超えている。そしてむしろそのことの確認により人間存在は自由を高次元での思惟の飛翔の自由を得るのである。思惟そのものや固定化された概念の世界を俯瞰でき、時間という概念からも空間という概念からも自由に解き放たれた永遠の自由(常にそれらはあったし今もあるのであるが)の内に己をそして世界を定位できるのである。

我々は出生して来たのであるが、このことを感じ学ぶためだけの理由で本当は存在し来たのではないのか。世界も我々も知により限定し定義することができないところの超越そのものである。そして出生して来たことに根底から震撼され、そしてこの奇跡に全宅しそれを受容しそれに感謝するのである。

世界が存在すること、この超越的構造物が精妙に機能し、すべてが何一つ例外なく完璧に整合し連繫している世界が存在すること。そして唯一無二の存在としてその中に組み込まれていることは正に驚異的なことである。そのことを認識し損ってきた人間存在の歴史とは一体なんと言わなければならない。塵一つとしても超越性が内在しているところの超越性そのものなのである。

人間の思惟は、超時間、超空間的に超越的でなければならない。既にそうなるべくして成っているのであるが、それを認識しなければならない。人間存在の意識は思惟は可能の実存として宇宙的、世界的である必要がある。そして既に永遠の中に居る永遠性なのである。存在している、そして存在していたことは絶対性として存在しているのである。

2-002

10/19/2016

時間というものには存在しない。概念として脳の記憶機構のなかから生成するものである。実際にあるのは生成だけである。現在においてすべてが現成している。過去のすべてが現在に継起され表現され表象されている。そして未来のすべてが現在に隠伏されて縮退している。それらの象徴を時間と称しているのである。

過去が現在に相轉移し凝縮し結晶化し、未来が現在において真空凝縮した縮退から新たな真空に状態遷移する臨界域にいる。臨界状態にある。存在化のために、生成のために存在の形式を帯びる臨界次元にある。存在の形式を帯びる前が未来、帯びて在るのが現在。生成は現在においてのみ顕現されている。現在において生成と存在が感じられ意識される。未来において現在を生成するように世界は駆動する。そして現在が有する形式内で未来は展開する。存在するとは生成してくる現在に、生成してくる渦のなかで存在するということである。存在と生成、存在と時性。存在するとは時性を帯びることである。

宇宙は世界は自己組織化する生命であるために必然的に時性を必要とする。そして生成、時性の形式は存在の形式に含まれる。あたかも以下の生命の自己組織化の比喩に似ている。

回路循環の中間生成形式としての現在があり、それが自己触媒として回路循環を更に駆動しながら自己組織化を展開していく。時性はその生成の表象であり、生成は存在の表象、象徴である。

存在物が存在するとは、生成のなかで存在することであり、時性のない存在物はなく、存在物のない時性はない。存在物と時性は存在の必然的な自己双対である。存在は己と自己双対な存在物と生成を介した存在の自己創出である。存在物が存在するということは存在が必然的に有する生成の渦のなかに被投されることである。そして世界形式に着色されることであり、そのように固有値化される。つまり、固有の凝縮相のなかで固有値を付与されるということである。存在形式と生成の表象としての時性を帯びることにより存在している、ということである。

なぜ実存が存在という地平形式を直観できるのかは、悟性にとって大いなる謎であるが、実存による存在覚醒は世界を超越している。あらゆる世界の営み、人間種の営みを超えて、生成と時性を超えて超然としている。人間が一生をかけて出来得る最大のことは、実存による存在覚醒である。それをなし得た者は生と死を超えている。そのことの経験と自覚のために人間種として存在しているとも言える。

悟性による世界解釈を超えて、実存という歴史的絶対性において、今ここにおいて瞬間に永遠を観るのである。他に比肩することのない永遠なる絶対性をである。

2-003

11/12/2016

時間が在るわけではない。存在物の相変化、相転移があるだけである。空間が在るわけではない。存在物が存在化する自由度が在るだけである。それらの概念が真に存在するのだとすれば有限化されていなければならない。しかしそれらは概念上で有限という境界域をもっているように表現されているが、そのような境界が存在の下ではあり得ない。存在は唯一でありすべてであるからである。

我々、人間種にとって存在と存在物を認識できる形式で様々な概念を使ってそれらを表象しているだけであり、認識はあくまで人間種における可能な認識である。人間種に写像された相関関係、関連性、依存性を認識しているのである。元来それら全ての概念ではその本質は認識できないものである。人間種自体も、世界も、存在物すべても超越性そのものであるからである。超越性としての存在を付与され帯電した超越性としての超越である。

存在化するということは、存在の相の下で固有化されることであり、相転移化、凝縮されるということであり、つまり偏極されることである。世界定位することはその偏極された世界内での認識主体の認識形式による認識である。そして世界定位には常に不完全性があり究極的純粋相は在り得ないのである。

しかし実存というこの絶対的歴史性を自覚する高次の意識の前では、すべての存在物は存在の下で統一されている。人間種として存在物だけでなく存在を意識し、世界をつまり存在物を俯瞰視できる存在にとってこの高次の俯瞰視する意識は人間種が充足する最大の境地である。

存在意識から観る圧倒的世界がすべてを領している。科学による還元主義とは逆である。

還元主義による存在物の究極的解明によって存在物および存在の意味を解明することはできないのである。

既に偏向、偏極化されている悟性で世界解釈し世界定位することは、新たな混合相を生成させ、自己循環構造を有する論理構造のなかの錯綜した関連のなかに立つことである。

純粋相は常に偏極され着色されて人間種に顕れるのである。しかし存在は直接、直観として把握されるのである。実存にとって絶対的歴史性としてその都度確信され完結されているのである。人はそのことの確信によって世界を超越しているのである。

存在が何であるかを問うことが徒勞であるように、存在が存在化させている存在物の究極の本質的意味を問うことも徒勞である。それらは我々の悟性、概念を超えた超越性である。我々人間種にはそれらの写像が顕れるだけである。種々の双対性として顕れるだけである。

我々は逆にその認識の限界性を知ることによって自足し納得するのである。それらの存在の形而上学的な全体感覚によって自己整合し自己完結している超越的世界に存在している自己が見えてくる。すべてが超越性としての存在物として超越的形式としての存在との絶対的関連性のなかにいる。それ以外にはない驚異の超越的現実が現前している。

哲学的生活は、それらのことのその都度の自覚である。そのことによってのみ独立性と自由性が保持される。

2-004

11/18/2016

世界定位は存在物の間の相関性と相対性の認知と、それらの関連性の中の統一原理への還元と一般化、定式化への探求であり、それらの理論模型の自己無矛盾な整合性の悟性による体系構築であるが、存在覚知はそれらとは全く異なる実存の直接的な超越性の覚知であり、体系構築の志向を有しない。覚知と同時に完結している実存の絶対的歴史性がそこで確立され成就している。

常に実存による存在覚知が優先して全体を領し、その下で更にそれに裏打ちされたなかで世界定位が並行して成される必要がある。どちらかに偏向していればどちらも意味を成さないのである。

科学的世界定位は常に時間性のなかで為される未完の過程にあるが、実存による存在覚知は時性を超えており、存在覚知と同時に永遠性が実存のなかで自己完結し自己成就しているのである。

2-005

12/31/2016

空間とは何なのか。

存在圏のことであり、存在が成立している圏域のことである。

度量衡的概念をも内に含むが、より高度な抽象性であり、同時に具体性でもある。

存在することを許容された存在情報が存在する、超越性が発現し、存在が顕現しているところの位相的場である。存在物の自己双対としての概念一般である。

認識主体によって形式、形態が顕現している具体性が絶対的歴史性として在る聖性そのものなのである。実存の超越性と唯一無二性、奇跡の出来事。

2-006

1/14/2017

- 宇宙項が負の場合AdS/CFT対応はうまくいっている。  
しかし、平坦な時空や、宇宙項が正のドジッター空間の場合ホログラフィーがどうなるかは未解明。
- ドジッター空間の場合は、時間軸がホログラフィーで力学的に生成される可能性が高い。  
時間という概念自体は絶対的なものではなく創発的(Emergent)である。

2-007

1/24/2017

認識の発展が示すように、その時点での任意の科学原理と理論は適用範囲が限定されており、あとになって一般化によって置き換えられ、そのより一般化した理論の特殊な場合の極限あるいは近似として置き換えられる。これは果てしなく続くのであり、その意味での最終的理論や世界像が樹立されることはない。これは時間と空間に関しても言えることであり、認識発展の現段階の範囲において一般的で必然的な普遍性を持つのである。

ポアンカレによれば、物理学と幾何学は独特な相補性の関係にある。物理を適当に調整し修正する気があれば任意に幾何を選ぶことができる。これは現代物理とくに位相的(トポロジー的)弦理論にも言えることである。

よく以下のことが言われる。”アインシュタインは重力場を幾何学化し、重力を空間の曲がりという幾何に還元した”と。重力場と時間・空間の曲がり完全に同等だということは正しくないが、重力の現象と幾何学的性質が密接に関係していることは確かである。  
ホイラーの多重連結のトポロジーを持つ空間の導入や質量と電荷の幾何学的モデルが作られ、粒子は把手やのどなどのトポロジー的特異性を発生させる空間・時間の局所的ひずみ、などの理論が出された。これは現在の弦理論のジーナス、オイラー数の導入などと似ている。すでにその時代にそういう発想があったということ面白い。

物質の完全な幾何学化は不可能であると考えられる。空間は物質の属性のひとつに過ぎない。それにも拘らず、物質の他のすべての性質である運動、因果法則、相互作用などをすべてそれに還元させることはあり得ない。そして物質はそれらの属性の総和以上のものである。

2-008

1/25/2017

次元、空間、時間は存在物が存在する、あるいは存在化される時の形式である。存在はそれら様々な存在の無限に縮退した無一形式な状態の中から或る固有の形式を存在化させているのであり、それは丁度相転移によって対称性をもった凝縮相から対称性が破れていくことと似ている。  
存在はそれらの無限にある形式を内に蔵する超越的形式である。

存在物は多様な形式を取り得る。次元、空間、時間は人間種の生物学的機構がそれ特有の形式で世界と接続する際の人間種に有る所与の形式に射影される概念である。そのため当然人間種が接続不能な把握不能、理解不能な多様な形式は存在し得る、といっても矛盾は起きない。

次元、空間、時間が固定値化され限定され、それ以外にはない形式とした場合、存在の超越性は固定され限定されることと同意であり、それは背理である。

そのため私は異なる計量的、位相的性質をもった多くの空間・時間はあり得ると考える。

存在が超越的であると同時に存在化される存在物も超越的であり、定性的にも定量的にも極めつくせない。次元、空間、時間とは少なくとも、われわれ存在物にとって存在が顕われるところのものである。存在の自己双対としての生成が自己展開する自由度としての象徴であり、存在物が存在化されることの超越的形式としての場である。

自然界には常に不変の基準尺度が存在していると考えるのは観念論である。このようなドグマが全く使い物にならなくなるか、特定の現象のみに当てはまることなのかも知れない。

数学的空間には非計量的な位相空間のように距離の概念がないものがある。もしマイクロ世界の空間が非計量的であるなら、その空間には位相関係だけが計量的関係が存在しなくなる。度量衡的概念が意味をなさなくなり、このような場合は長さや時間間隔の概念自体が意味を失うことになる。

私はむしろそれが世界の現実だと思う。

2-011

6/8/2017

宇宙と生命。

最近の宇宙論では、今までの標準的宇宙論とはかなり違う理論が様々に出てきている。主なところではアインシュタインの理論の修正版としての修正重力理論MOG、これはモファットらが唱えているもの。他に私が興味を持っているのは新たな”くりこみ可能”だとする量子重力理論である。その理論での主な特徴といえば、

- インフラトンのような人為的なスカラー自由度を導入しなくてもインフレーションやビッグバンを説明できる。
- くりこみ可能な量子重力理論ではプランクスケールで紫外カットオフを導入する必要がない。
- 10の120桁の宇宙項問題の微調整は存在しない。
- 初期のインフレーションと現在のドジッター膨張を、異なるスケールで説明することができる。  
インフレーションはプランク質量。ドジッター膨張は宇宙項。
- 暗黒エネルギーを導入する必要がない。
- 暗黒物質は、現在の宇宙の物質分布や、銀河自身の回転曲線の異常から、通常の物質とは作用しないが、重力の影響は受ける物質があると想定されたものであるが、量子重力理論に基づく安定な重力的ソリトン解が存在すれば、それは暗黒物質の候補になる。

いずれにしても、宇宙は宇宙の構造の種としての時間も空間も物質も何もない”無”としての”密度ゆらぎ”が、インフレーションによる指数関数的な膨張により、かつ同時にゲージ場が対称性を保っていた状態からエネルギーの低下によって次々とゲージ場の対称性の破れが起き、現在に至っており、空間は現在も加速度膨張している。ということは、いまや標準理論になりつつある。モファットの修正重力理論もダークマター、ダークエネルギーを除けば受け入れている。しかしこれらは現代素粒子論や場の理論の応用としての宇宙への外挿である。

モファットらのMOG(修正重力理論)でも同じようなものである。時刻ゼロでは空間も物質もエネルギーも存在していなかった。物質がないので時空の曲率である重力も存在しなかった。この原始の真空ではハッブル定数もゼロだった。時刻ゼロでは静寂と空虚の状態だった。しかしMOGでは時刻ゼロで特異点は現れない。時刻ゼロの近くで”量子力学的ゆらぎ”、”真空のゆらぎ”が物質粒子やエネルギーを生み出す。MOGでは”無”(真空)から物質と放射が生まれる。宇宙誕生時に特異点は存在しない。MOGでは、時刻ゼロでの特異点を避けるため、時刻ゼロでは物質も放射も重力も時空の曲率もゼロだった。そして宇宙は空虚で空間的に平坦なミンコフスキー時空であったという条件を課している。

くりこみ可能な量子重力理論とMOGの共通点は、まず超弦理論のような余剰次元を導入しない。あくまで4次元時空を前提としている。次に一般相対論からの帰結であるダークマターの存在を必要としない。そして様々な宇宙論が生まれている。ブレーン宇宙論、5次元宇宙論、ランドスケープ理論、ループ量子重力理論、…。いずれも現段階では仮説であり、もっともらしい理論候補だとしか言えない。

”無”とか”密度ゆらぎ”とか”量子力学的ゆらぎ”とか”真空のゆらぎ”と呼んでいるが、名づけようがないからそう呼んでるだけで、完全な対称性としての無、時間も空間も物質も無い、当然あらゆる人間が抱く概念はそこでは一切通用しない。

存在物が何も無いから存在自体が成立しない。存在を別の存在で説明することはできない。そういう”もの”(ものとは謂えないもの)からの、時間、空間の生成から始まり、相転移と対称性の破れによって複雑化が開始され、各々のシステム系自身が自己触媒となるハイパーサークルを通して宇宙が世界が現在に至るまで自己組織化してきた結果がこの世界である。という論理がまかり通っている。

本当にそうだろうか。非物質的な情報や位相性からどうやって存在物が創発されるのか。あるいは逆に物質的に我々が思っているものは我々が概念としてそう定義しているだけであって、本当は我々が考えている物質は、”情報と位相性”そのものである。と考える方が矛盾がない。おそらくこれが本当のことだろうと私には思える。

生成は、またそれに必然的に付随する時間は、”存在を背景依存としている”。それに対して存在には依存するものがない。存在には自己自身以外の他者はない。 ”存在は自身を背景として自身に依存している”、自己内で完結している超越性である。この物理的宇宙の始原に関する問題に対する現代の宇宙論には、”無”と”存在”という最も形而上学的な問題が絡んでいる。早計にあるいはいたずらに記号論理としての数学による外挿をおこなうべきではないと、私は考える。

— — —

おおまかに標準的な宇宙論から言えば、宇宙自身の自発的な対称性の破れから、段階的に相転移を起こし、放射、物質を生成し、それらが自己組織化して現在の構造を造り、各々の組織系におけるハイパーサイクルによる循環する自己組織化回路を構築し、サイバネテックスとしての自己制御マシンとしての生体を構築した。その自己組織化するダイナミズムによって、最も複雑化した情報処理組織としての人間において、意識、自己意識、対象化意識、主客分裂した意識系、存在意識、を創発するに至った。ということである。主客分裂した意識において初めて自省作用と自己認識が可能になる。

---

遺伝子レベルで見られる、DNA編集、スプライシング、修飾、・・・等の自己組織化の機能と事象は、宇宙においても同じく認められる。宇宙自体の自己組織化としての或る種の”志向性”が見られる。この自己組織化機構とは何の表れなのか。生命のダイナミクスは宇宙のダイナミクスと同調している。

マイクロ進化において高次レベルへと移行が起こるときは、常に対称性が破れる。4つの対称性の破れがある。

1. 平衡熱力学のダイナミクスでは、時間対称性が破れて、過去と未来が区別される。
2. 非線形・非平衡熱力学ダイナミクスでは、自発的構造化や極性化に伴った空間対称性が破れる。
3. 散逸構造の進化では、新しい構造へ移行する際の不安定閾値において、それぞれ空間的対称性が破れる。
4. 外世界、内世界を創造するプロセス間の対称性の破れ。  
ここから進化する宇宙と人間との連結性が、独特な形で構造化されていく。

それぞれ生命マイクロ進化の4段階に対応する。

1. 熱力学／化学的段階。
2. 生物的／遺伝的段階
3. 後成的段階
4. 神経的(社会文化的)段階。

・情報移送に関して。

自然界には化学元素は100個弱しかない。生命はたんぱく質を作るのに20種類のアミノ酸しか必要としない。DNAは4種類のヌクレオチドの3個ずつの配列(4の3乗=64) 64種のコドンが必要とするだけだ。地球上の全生命である菌類、植物、動物を問わず、単細胞生物、多細胞生物を問わず、遺伝情報の移送は同じ形の分子構造に基づいて行われる。

生命は同一レベルに向けてはホリスティックな情報転送を行い、レベルを超える場合には情報をシーケンスに溶解させる。遺伝子段階コミュニケーションにおいては”型版作用”により、代謝段階コミュニケーションにおいては、”共鳴状”のコミュニケーションにより移送される。神経段階コミュニケーションでは両方が使われるが、最終的には”4次元直接経験”によるホリスティックな伝達モードを使う。

進化は、この”4次元直接経験”をより高度にしていく。

そして空間構造としての宇宙はより自省的になり、その進化のプロセス自身は自己参照的になっていく。

世界の時間空間の概念がない、完全な全一の対称性としての無からの自発的対称性の破れという自壊により、様々な進化(自己展開)プロセスを通して、高度に複雑化した情報処理系としての人間を創出することになる。世界はその認識部位としての脳にホリスティックに射影され、脳はそれらの情報から世界をそして自己を内部構成する。そして主客分裂という対称性の自発的破れによって、自己、世界、自己と世界とそれを構成する超越的自我を意識し認識する。そして”存在”に対する意識が生じ存在意識が存在驚愕へと進化する。こうして世界は対称性の破れによる相転移によって世界のなかに世界に対する存在意識を創発することになる。

宇宙のそして生命の自己組織化する志向性は、その自己触媒的ハイパーサイクルにより更に濃縮化され、それらはより自省的、自己認識的になってゆく。統覚の自発的対称性の破れにより意識はより高い次元に相転移し、主客分裂した超越的意識を生起させる。そして”4次元リアリティ”のなかに”存在”という超越的形式を意識し、それを”直接的体験”をすることになる。

この見えざる意志としての志向性は、存在の”意味”を問う。この志向性は自己の意味を問い意識する認識体の創発に向かっての存在自身の志向性として定義できる可能性がある。

世界(>宇宙)自らの存在化への志向性が、時空を創出し、自発的に対称性の破れを起こし、相転移を経て、自己を意識し、自省し、自己認識し、それから存在を意識する存在物を自己内に構成する。

志向性の先にあるのは、この存在を意識し、対象化する思惟するものを出現させることにある、とも言える。そして存在はその主客分裂した思惟体によって対象化されることによって”意味の循環回路”が環結し、究極の対称化、双対性、自己双対を成す。

存在は自己の超越的意味を成立するために自己解体し、自己双対としての存在物を増殖させその意味を完結させる。世界の自己組織化ダイナミクスはその過程のうちにある。

存在を思惟し意識し対象化する自己双対によって自己反照することで意味回路を閉じ、自己解体という自発的対称性の破れを起こし、それがやがて対称性の回復に反転する。 と言うこともできる。

存在というこの唯一無二の絶対性としての対称性が破れた地平形式が、自己内での己の自己双対の創出により、あたかもそのことにより対称性を回復するかのように己自身を意識する主-客-分裂した存在を存在化するための自己回帰回路としての自己循環の過程。これが世界であり、生成はその動的平衡のなかで進化している過程である。と思わせるところがあるのである。

存在という概念は我々のなかで構成されたものであり、それは生理学的機構による統覚からなる自意識と、それをさらに内部から対象化する意識と、世界と自意識の連携を意識できる意識が無ければ成立し得ないものである。世界、存在は我々意識体によって構成されたものであり、自己組織化する世界と自己組織化する自己との接続およびそれらの直接的関連性から世界とともに創発したものであり、我々がそれを対象化しない限り、世界という超越的構想は成立し得ない。

存在の自己超出は対称性の破れを必要としている。そのための生成のダイナミズムなのであり、そのための時間、空間、物質の創発があるのである。そしてそもそも世界自体には我々が予想するような意味はなく、無色の、定義の対象とはならないものを、対象化することによって着色し、脚色している。

世界に意味とか価値はそもそも無く、それらは我々の内部で構成されたものであり、われわれ無から発現し無に帰すものは、存在化し発現したこの世界を意味付けたい衝動に駆られる。しかしそれは我々の存在形式が有する意味であり価値であって、世界は我々の意志に関わらず、我々にとってどこまでも超越的であると同時にどこまでも没価値的である。

そして世界は度量衡的ではなく超越的に位相的であり、無意味的であり無価値的であるところの想像可能なすべてである。世界それ自体は世界の我々に対する拘束性のなかでのことである。

われわれは意味付けし価値付けしようとする衝動をもった思惟体である。  
存在意識だけが直接的に没意味的、没価値的に繋がっている。  
そこにあるのは、それらから自由になっている世界である。  
存在を直接体験するために無から発現した。それだけである。そして存在の無い無に帰る。

4次元のリアリティ、現実性、直接的直観経験は、単純な生物学的な意識作用ではなく、思惟する意識体が主客分裂している意識内において内部構成しているものである。  
存在確認はその意識体が既存概念では解釈しようのない存在驚愕として顕れる。  
本源的な存在意識はその存在驚愕を前提としたうえで、それらを包含しかつ超えているものである。

―――  
宇宙の生成のこのダイナミズムは、世界(宇宙)の生命としてのダイナミズムであり、世界自体が自己組織化する生命そのものである。ティヤール・ディ・シャルダンのΩ点や、ニーチェの永劫回帰、権力への意志、などは厳密には異なるが、同じ”世界の志向的ダイナミズム”を表現したものと私には思える。

存在を意識するものにおいて、時間―空間結合が、この4次元の今においてリアルになされる。  
”4次元リアリティの体験”、実存はそのことを体験し確認するための生でもある。  
そして世界および存在は、元来、時間、空間、物質、構造・・・という概念のないもので位相的なものであり、世界の自己展開は、位相的に相同的になされる生成の世界である。  
我々の悟性、概念では届かない超越的形式に背景依存している超越的位相性である。  
我々、思惟し意識し認識するホリスティックな位相体は存在を認知する超越的実存である。

今、ここにおいて時間、空間結合が現出している。実存は永遠を4次元リアリティとしてリアルに感じている。

物質と我々が呼んでいるもの、存在物自体が位相的である。生物的感官が表現するイメージは我々の概念の生物学的形質に由来するイメージである。存在を意識しているという構図自体が位相性をもっている。  
存在意識はそのなかのことである。

2-012

6/22/2017

宇宙と存在。

生体が外部からの様々な情報から取捨選択して自己の生命プロセスを維持している。物理的な例では細胞膜で起きているような浸透機能にみられる情報物質の取捨選択。生命は己を維持するため情報選択が必要である。そのことによって生体は外界との”動的平衡”のもとでの己の自己組織化プロセスを遂行している。人間においても、できるだけ己自身にとって”益”となる情報は透過し、それ以外は遮断することをやっている。

人間においては、それらの様々な自発的に選択した情報から己自身にとっての世界を自己内で構成している。そのように生体はそういう志向性を有している。生体の維持、増殖、においてその志向性は効用関数として作用している。

ところで、己が自己触媒となる自己組織化回路(アイゲンのハイパーサイクル)において、その”志向性”は濃縮されてゆく。自己組織化するシステムにおいては、この志向性を濃縮する循環的回路があり、それが複雑に連携しているのが生命系としての機能をもったシステムである。そして複雑化し高度化してくる生命システムは、システム自体の維持、複雑化、自治化、増殖化、・・・を優先した規約的な、行動規範的な、判断と決定のロジックのデータベースが集積したようなものが内部に創発される。これはマイクロな生命系でもマクロの宇宙でも見られるものである。宇宙におけるダイナミズムもそのなかにいる生物のダイナミズムも同じ自己組織化ダイナミズムそのものである。

生命レベルが高度に複雑化してくると、情報制御機能をもった脳が構築されてくる。そして脳内における情報量(視床-皮質系)が最大になり”意識”が創発してくる。その意識の対称性の破れにより主客分裂した自己と自己以外を対象化できる意識が発現してくる。膨大な宇宙史はあたかも、宇宙が自己の内部に宇宙自身を対象化し意識し思惟するものを生成したとも言える。このことが目的であるかのような志向的なダイナミクスを駆使して無からの自己分裂を起こした。とも言える。自己の内に自己を対象化し、自己を認識、意識するものを、志向性の先に自己内に孕んだ。かのような。

この壮大なダイナミズムには意味があると人間が考えたいが、それは想像できるだけである。そして、これらの壮大なダイナミズムも、”存在という背景内”でのことである。この壮大な宇宙のダイナミズムも存在を背景として生起していることである。そしてこの存在は、自己自身にのみ依存するところの自己環結している他に非依存という絶対的超越性である。我々はこの神秘の形而上学的現実の下で束の間の生を体験している。存在は人間にとっての極限概念であり、我々の思惟がそれ以上進めない限界である。”今ここに4次元的リアリティとして存在している”ということは、悟性、概念、論理、判断が通用しないところの具体性としての我々の現実である。

あらゆることが思惟され、相対、相関関係が解明され世界がより詳細に定位されたとしても、存在に対してはその極限状態において、すべてが止まってしまう。構造でも機能でも何かの属性でもなく、それ自身であり、自と対自が一体の対称性、自己双対である。他がない絶対性をわれわれは経験しているのである。

このように途方もない超越的現実のなかに、無から発現し、しばし留まり、そして無に帰してゆく。存在を旅する未知なるものが人間である。そして、われわれ人間には、無から開闢し生起した生成とその歴史がそのまま刻印されている。来たりて去るものであるから、存在を意識し感じることができるのであろう。この存在から消滅するものであるから存在を感じ意識できるのであろう。そして、われわれ人間には、”存在を意識すること以上のことは人間にはあり得ない”。

存在への発現としての生、脱去としての死がある人間は、この存在以上の自由度を有しているとも言えなくもない。存在は思惟の極限であるが、それを対象化し意識、認識できるということは、人間はそれらをも超えた超越性である、とも言える。存在を意識し対象化するところの、それを越えた(存在を自己超越した)存在であるとも言える。それは、生と死という存在を横断することができる自由度を有しているからでもある。生が無ければ死はない、死がなければ生はない。死がなければ存在を体験することがない。そして、存在の体験以上に形而上学的、超越的体験はないのである。

3-028

5/13/2017

生成と存在。

現存在は時間のなかにしか顕れない。時性は現存在の必然である。生成と不可欠に結びついた我々の生物学的感覚と直接的直観的経験によって我々は世界を認識するしか術はない。概念が我々の直観的経験から派生するように、存在という概念も我々の内部で構成され発現する抽象性である。存在という概念は主客分裂した自己意識をもつ意識系にのみ顕れるのであり、そしてそれは完全に位相的である。

我々は単純化し、それ以上細分化できない限界において根元というものを認識した、という自覚をもつにいたる。存在はそれ以上概念を分割できない根本的な概念である。最も抽象的であると同時に最も具体的な概念である。それを意識する実存にとって最も現実的でリアルなものである。直観的経験の最も基底的な現実である。同時に最も抽象的でホログラフィックな位相性である。生成における時性、生成・消滅が生起し続ける世界事象を支える根元的形式で、悟性で分析できない超越性である。構造、機能、因果性、論理、・・・等の概念がそこで行き詰まる限界である。認識、世界定位はそこで難破するのである。

そのことを実存として直観的に経験したことのないものは哀れである。自由を経験することが無いからだ。今ここに存在していることの驚異的な現実を感得することも無いからだ。我々は人間の社会的価値観、価値性から由来する論理によって洗脳されている。それは生物学的な生存の効用関数としてある。それが倫理となり、一つの法律的拘束性となり、思惟空間に拘束をかける。人間種の生存の代償として思惟形式は自ずと規定されることになる。

存在は厳然として我々にとってあるが、それは意識し思惟する認識体のなかにあるのである。対象として客体として自然科学的对象、悟性の対象としてあるのではなく、それ以前のものとして実存のなかに存在する超越性である。このことは絶大である。瞬間のなかに永遠を觀、世界内に驚異の奇跡を觀るのである。芸術性はここにおいては極限状態にある。言語を絶する現実のなかで、言語を絶する事態が生起し進行しており、言語を絶する自己を見出すのである。己は脱自的超越性として実存していることを自覚するのである。

存在は、時間や空間や次元のない位相的な抽象性の象徴である。生成はそれらを伴っている。だから存在は生成以前のより根元的なものである。生成のなかにおいてしか現存在は顕れない。そのため、生成から時間性を除いた世界面を存在として存在の概念の由来とするのは、間違いである。存在は生成を内に含む時性と存在領域としての空間の全体である。境界を有しない全一体という超越性である。

時間は無いので永遠であり、空間が無いので無限であり、無限性と永遠性が現存在に顕現している。根元的に具体性と抽象性を有する脱自的超越性であり、主客分裂以前の超対称性が具現化した位相的抽象性である。そして世界、現存在自体が位相的である。我々は世界から我々の有する生物学的感覚の形式、次元、機能の有効範囲内の直観経験から世界定位するための概念を内部構成して、そこから位相性からそれらの概念で構成された世界像を構成する、根元的抽象性を感性次元に抽象化した射影としての世界像である。

我々は、生物学的感覚によってのみ世界と接続できる情報処理系としての自己組織化体である。そして記号論理としての数学は一種の拡張された感覚である。この感覚は生物学的崩壊によって接続が遮断される。それゆえ、悟性と経験に由来する論理などによる人間における認識は生物学的に偏向された認識である。

生物学的感覚の形式の延長としての度量衡的概念は限界に行き当たる。存在はそれらによって本質的に捉えられることはあり得ないからだ。存在は、形式、構造、機構、物質、大きさ、量・・・等の概念以前にあるものだからだ。時間、空間、次元という概念は生物学的感覚の延長にあるものであるから、それらで捉えられることもないのである。

我々は主-客-分裂においてのみ世界をそして存在を対象化できる。そして対象化する場合は、己自身が備えている形式、機構、認知可能なレベル、自身が有する所与の志向性などによって対象化する。あるいはそれ以外に術がないのであるが、対象化するには自身のなかで自身に顕れる世界表象(これはそもそも既に情報変換された写像ではあるが)、を自身のなかで内部構成している、あるいはそれ以外にはないから内部構成するように仕向けられている。主客分裂している思惟は対象化しているつもりになっているが、これは既に必然性のもとで実は対象化するように内部構成されているのではないか。対象化しているつもりになっているが実は対象化するように世界内で構成されているのである。

存在物は永遠に我々の概念や悟性では到達できない事象である。生物学的にそしてその延長としての概念によってのみ接続できるだけである。永遠に認識が到達できない存在物から構成された未知の存在物としての己自身が在る。存在も存在物も、生物学的概念からは永遠に手の届かない仮象としての抽象であり、度量衡的概念に対しては対極にあり、これらは位相的に在る。

実存は独自の絶対的時間、空間を生きている。この感覚は芸術的感覚の極致である。このことを直観的経験で感じた経験があるかないかによって人間種は二分されるとさえ言えるほどのものである。

世界は位相的であると考え、世界の本質を射当てた感があり、私は精神的に充足した気分になる。世界はそのようにして存在する。そして存在は、これ以外の仕方では存在しないというふう存在する。

このように現実に存在しているということは絶対的超越性が背景として根元的に支配していることの顕れである。

- ・唯一無二。他と多ということが成立しない絶対性である。
- ・世界総体がその次元形式の支配下にある。すべてがそこに包越されている。
- ・世界に存在する存在物は存在との充実なる整合性の下でその存在が保障されている。そして存在物の無い存在は、そもそも存在自身を否定することになる。
- ・存在物である人間は、存在という超越的次元形式のなかで生物的構造体という形式、構造、機能、・・・として存在との全き整合性の下のみで存在しているし、存在し得る。
- ・存在は人間のもっている概念、悟性、論理を超えており、到達不能な超越性として人間の存在を完全に支配している。
- ・自然科学は生物学的感官から派生した概念、論理、因果性による探索であるが、存在はそれらでは到達できない限界の境界の先にあるものである。
- ・存在は永遠の謎である。理解するには最も人間には遠いものであるが、直観的に経験するには最も近い具体的な現実である。最も抽象的であると同時に、最も具体的なものである。
- ・存在には概念、論理は通用しないので、直観的经验による覚知によって体感し、様々な概念によってする否定のなかから浮かび上がらせることによって予感させ得るものである。
- ・度量衡的概念からいえば、永遠と無限が有限のなかに射影されている。時間において永遠、空間において無限大なものが有限に固有化された存在物に顕現している。つまり度量衡的概念は一面的な見方であって存在においてはそれらは破綻している。現実とは位相的である。
- ・存在との関係で人間を見ると、今更ながら実に奇妙な形態、構造、形式をもった存在物である。人間は完全な世界拘束のなかで膨大な時間を費して進化し自己整合と自己組織化を行ってきた。そのためにこの一見奇妙に感じることに関して関心を示さない当たり前のこととして無意識に看過しているのである。人間はそういう限界状況のなかで生活し、様々な経験を生かして世界に順応し、そして人間社会を構築してきた。長い膨大な時間を要して創出した自己組織化の産物である。そして存在を自覚するに至ったのである。これは驚異的なことだ。
- ・存在には、意味、価値という人間的なものは何もない。ただ存在物を存在化させているところの絶対的超越性そのものである。存在物は存在自身を成立させている存在の自己双対そのものである。存在物が存在しなければ存在自身がない。世界のすべてはそのなかに存在化されている。ある形而上学的形式が存在物そのものに顕現している。それは言葉にできない圧倒的なものである。
- ・存在を科学的概念で解釈しようとする、あるいはそれが可能だと考えることは、存在の何たるかを全く認知していないことの証左である。
- ・直観的经验により体感し、自己内部で形而上学的に構成する以外に存在物であるわれわれ人間にとっては存在に関してできることがない。
- ・存在はあらゆる虚飾を払拭したなかで我々にとって顕れてくるところの超越的現実である。圧倒的な現実である。
- ・存在を理論的に体系化しようとしても何の意味もない。
- ・存在は解明する対象ではなく、実存として真性の意味において受け止めるものである。
- ・存在の絶対的歴史性を直観的经验によって体感したことの無いものは、己自身の生を夢のなかで生きていることと変わりが無い。
- ・存在が展開する領域(世界)は位相的である。生物学的感官の延長にある概念とは境界を有している。境界を超えた悟性、概念の限界を超えたところにあるものが、すべてを支配しており、概念から見れば超越的であり、形而上学的である。
- ・存在という絶対的超越的背景。それから逃れることが意味を成さない拘束性ではあるが、拘束が拘束でない必然性としての形式であり、他には無い、人間の内部でそれに代わる形式を構成することは自己矛盾を起こすところの次元形式である。
- ・存在は、生起する世界の時空間の時間軸が一定の、つまり時間が止まっている場合の世界面全体のことでなく、時性を伴って生起し続ける世界事象全体を含むその形式全体を抽象的、位相的に人間内部で構成した写像全体を指している。存在という概念は己の自己双対の存在物による生成をうちに含む形而上学的な、概念の限界を超えた超越性である。

生成、時性を含んだものが存在である、ということと存在が次々に時性と共に生起して来る(生成と共に存在が生起する)とは同意である。

生成とは時性を伴った存在の生起を意味し、生成とは現象生起であり自ずから時性を伴っている。存在は生成をうちに伴っているという抽象的形式、地平である。生成と時性は直観的経験が覚知できるものである。それに対し存在は人間の内て構成されたものであり、そこに位相的なあるいは形而上学的超越性を付与したのである。世界の対象化の行き着く極限である。主-客-分裂した意識が世界を対象化した際に自己内部で創発する。

この存在は極限概念であり、それ以上深く悟性が分析できないところの限界である。だから最も抽象的であると同時に最も具体的な現象生起する生成としての具体性なのである。

存在覚知は思惟の極限の境界の先にあるものである。自然は自己を覚知するために、回路系を作り、自己触媒によって更に濃縮するという自己組織化によって存在を意識する思惟するものを創り出すために駆動しているかのようだ。自身を覚知するために存在は思惟する存在物を創発させているかのようだ。

存在物がない存在には意味がなく、何ものによっても対象化され意識されることのない存在は無意味である、ということから来る必然性、志向性が存在にはあるのかも知れない。

存在自身の対称性の破れへの志向性が自身のなかに時間、空間、次元を創発し、存在自身を対象化する主-客-分裂する思惟系を複雑多岐にわたる進化のなかで創発させ、それによって存在を意識させ覚知することのために、すべての創造プロセス、ダイナミズムが駆動している。ということはある程度である。存在自身が自己認識するための世界のダイナミズムだけが在るだけなのかも知れない。

現在の量子重力理論(くりこみ可能なQG)によれば、時間と空間の概念がない共形不変な時空から現在の宇宙が構成された。そして力学的エネルギー  $\Lambda_{QG}$  をプランクスケール  $10^{19} GeV$  より低い  $10^{17} GeV$  の値にとると宇宙の進化はこれらのスケールによって共形不変性が破れていく過程として表され、インフレーション、時空の相転移としてのビッグバンを経て、現在のフリードマン宇宙に移行する。プランクスケール付近での共形不変性の破れは小さく、量子相関は”べき的”に振舞うが、力学的スケールでの共形不変性の破れは対数関数的で、共形不変性はこのスケールでは急激にそして完全に破れる。また指数関数的な膨張を引き起こすプランクスケールによって時間が力学的に生み出されるとする。それ以前は変化が極めて緩やかで、揺らぎの方が勝っている時間のない世界であった。

そのように進化の普遍的始原においては、時間も空間も未だ展開せざるものであった。すべてが超対称性として全特質もすべて一体であった。そして展開が始まると共に、時間と空間の対称性が段階的に破れていった。

このように自己超越は、対称性の破れを通してしか達成されない。

そして生成を駆動し、存在は自己超越するために、自発的対称性の破れを起こし、数々の相転移段階を経て自己組織化し続け、意識をもった主-客-分裂した思惟する存在物を創発させるに至った。

自発的対称性の破れにより、次々と相転移を起こし、有限に固有値化した凝縮相のなかに、主-客-分裂した意識を有し対象化できる自己組織化しながら進化してきた思惟系としての構造体を発現させてきた。現在もそのダイナミズムの過程にある。

その統覚と意識を有する思惟系によって存在を感得することにより、存在が生成創出した意識体により存在自身が対象化されることによって、主-客-分裂は止揚される。

自己循環による自己完結回路への志向性の顕れが世界表象の本質的な根拠なのではないかと私は予想するわけである。

対象として意識されないものに何の意味がある。存在を対象化する思惟系を発現させるための全包括的なダイナミクスが駆動している。これが生成の時性の本来の意味なのではないか。

存在は対象化されることによって自己回帰する。その志向性の下で主-客-分裂する意識系を創出するように相転移、自発的対称性の破れを起こし、その思惟系(自己組織化する生命体)の発現を準備する。

世界のダイナミズムはそのプロセスの過程にある。

-----  
現実においては決して同じ事象は起きない。生成は同一に生成することはない。現実はそのように生起する。人間は経験の記憶との照合により同一の形式、ゲシュタルを抽出し、その形式、様式の下で同一という概念を、位相的概念を創出する。それは概念の抽象性、人間内部で構成されたものであって現実の具体性として生成には同一はあり得ない。我々は概念空間で思惟しているものである。

曇った眼にとって現実はいま以上にリアルに生起してくる存在である。これは驚くべきことである。だから現実はいま超越的現実である。

私は絶対的歴史としての現実を見ている。そしてそれは存在と宇宙とのなかに絶対的歴史性として連結している生起している超越である。

人間は無から生じ、世界を主-客-分裂して対象化するときの、対象を概念化しその概念空間において世界を射影するところの、思惟する位相系、位相としての現実世界に位相的に存在する主-客-分裂した形式をもった位相体である。それが存在を捉えた。生起する存在を概念ではなく直接的直観経験で捉えたと認識するところのこの思惟する人間の発現は画期的な歴史的事象である。

存在するとは、時間性という静止は絶対にありえない一方向性のみの自由度を有する生成のなかに存在するということである。そして存在を直観的経験として感得する経験は、存在していること自体を感得するのである。この次元形式、地平は我々には決して理解できない超越性である。無から発現し無に帰する実存にとって存在していることは驚くべきことであるが、その意味は形而上学的超越性としての暗号として我々にとってあるのである。

存在は悟性、概念、知によって捉えることのできない次元形式である。感官の統覚と主-客-分裂した主体の意識によってのみ直観できる。それによってのみ接続可能な絶対的超越性そのものであり、それ以外には顕れないものである。だから存在驚愕を経験しなかった思惟体は生を真に経験したといえるだろうか。存在驚愕からみえる現実には驚きの現実が広がっており、己自身が驚異の存在であることを身にしみて感じる。壮大で不可思議な驚くべき現実が存在している世界。

存在しているとは、理解不能な圧倒的な絶対的超越性であり、悟性、概念、論理、言葉の先にある具体的に顕現している現実である。具体的とは、世界-内-存在としての必然性として、存在化の必然的条件としての必然性としての生物学的形式、資質を有する現実としてということである。

3-029

6/10/2017

存在と存在物。

- 存在と存在物は自己双対かつ相補的關係にある。  
存在物は背景に存在依存性を有しているが、存在は背景非依存であり、それ自身である。  
存在はの他によって定義できない他に依存しないところの超越性である。
- 時間、空間も存在以外の背景をもたない存在物のもっとも基底にある存在形式である。
- 生成は現象生起として存在の下に現れてくる。生成と共に存在が現れてくるのではなく、存在の地平に時性を伴った生成としての現象が生起してくるのである。
- 存在はなにものによっても定義できない絶対性であり、概念、言葉、悟性、思惟を超えた超越性である。  
その存在が存在していることは、存在と相補的かつ自己双対である存在物によってのみ対象化され得る。自己反照によってのみ対象化され得る。  
対象化するには主-客-分裂した意識を有する存在物が必要である。そこに至るには、つまり自己超越するには対称性の破れが必要である。
- 時間空間の概念のないところから、存在が対象化されず顕現していないところから、自己展開を自己解体を始めた。生成を開始した。一瞬にして空間を拡張し、最初の自己解体としての対称性の破れを起こし相転移した。それから次々と解体(対称性の破れ)が連鎖した。この現在に至るまで空間は10の59乗倍に拡大し、少なくとも解っているだけで4回の相転移を経て現在に至っている。
- そして様々なダイナミクスを通して、意識を有する主-客-分裂した存在を対象化する思惟する生物を生成するに至った。それは絶対的超越である存在の志向性によって自己(存在)を認識する存在物を創出する自己循環のようである。
- 世界はその志向性の下で展開する志向性を帯びた存在によって構成された位相性としての世界であり、そのみであり、このことの認識は志向性によって仕込まれたことであるかのようである。  
そのために種をまき、舞台としての空間を創出した。そして生成の必然的側面が時間(時性)である。
- 存在を対象化し意識するところの存在の自己双対である存在物を創発することにより自己完結し、それから反転し、解体から統一、複雑化から単純化への回帰(対称性の破れから修復)に急激に向かう。  
これを永久に行う。永劫回帰する。
- われわれ人間は徹頭徹尾にわたり汎宇宙的である。  
われわれの概念も、思考形式も、思惟も汎宇宙的であり、位相的かつ超越的であるとする認識が必要である、と感ずるのである。
- 社会的通念、常識、権威、教条、因襲、閉鎖性、権力構造、階層性、格差、……これらは、この宇宙において何ほどのこともない。更新されるべくして過程的に存在している倒錯であり、生物学的恐怖である生死から生じたものの集合物である。それらは常に更新されるべく生成の過程のなかにある。
- 直観的経験から存在を意識し、存在を体験し捉えたことは宇宙史における特筆すべきことである。

3-030

6/28/2017

存在驚愕としての世界。

なぜ存在しているのか。なぜこの思惟する生物種が存在しているのか。まったく不可思議なことである。人間というこの思惟する生物は、生物という形式でしか存在することを許容されていない。あるいは、生物として膨大な時間のなかで複雑系が自己組織化してきた結果、意識をもち悟性をもち、主客分裂が生起するに至ったから”存在”という概念を内部構成するに至っている。そのようにして存在を認識できる生物として存在しているのだから、そういう形式でしか存在化すること以外には不可能だった、ということである。そしてその生物は情報処理増殖し自己組織化するサイバネテックス体である。実に高度に機能する自己組織化し続けているところの情報を吸収し変換し吸収し蓄積し排出する情報変換処理系である。

人間の存在は特殊な状況に置かれている。世界一内一存在として存在化され、生成流のなかに被投され、そして必ずこの世界から消滅する。そのなかで自己、世界、存在の意味を問い質している。世界が存在していること、自身が存在していること、その全体が不可思議な状況であると”感じている”存在である。この”存在”について思いを巡らすことは、この生物としての人間のみであろうと予想できるということは、どういふことだろう。最終的には、人間は何ものによっても擁護されていないという現実の状況のなかにある。

無から世界内に発現した全く奇妙な、有期限を宣告されて存在することを許容されている世界一内一存在としての存在である。そして世界内に存在しているが、世界が何なのか、なぜ存在しているのかも知らない。自分自身のことも知らない。そういう現実態のなかに投げられ存在化されている。

世界、存在、自己というこの存在構造、これ以外に”存在”が存在しない、という驚き。存在している間、つまり生物学的な死と誕生の間はそういう状況のなかに置かれているという状況である。人間はそういう状況のなかで存在を”感知”している存在である。これは実に奇妙なことである。人間はその奇妙さを楽しむこともできるが、”なぜなのか？”と問う満足しない存在である。人間は、世界、存在、自己という構造以外に存在しないことに”異常さ”を感じる存在である。

我々は無意識のうちに常に生物学的である。一瞬でも生物学的でなければ存在できない。一瞬一瞬に生物学的に環境と動的平衡状態にありそれを維持している、死を宣告されている存在である。常に生きている間は、この生物的な存在形式、構造、機能を、無意識のうちに受け入れ生きている。生きている間は、すべて生物的に存在が”条件化”されている存在である。

唯一無二の絶対性である存在を対象化して思惟する存在が、存在のもとで存在していることは実に奇妙で不可思議なことである。この思惟し存在するものが存在しなければ存在は意識されることは無いだろう、という実に、驚天動地の現実のなかに組み入れられているのである。そしてこの根本構図は他にもあるということが無いのである。

存在自身が、自発的に自身の完全な対称性(無)を破り、いわば存在が自ら相転移を起こし、膨大な時間、空間のなかでのダイナミズムとしての自己組織化を推進し、自身の内部に存在を対象化し覚知する自己組織化したこの思惟する人間を創発させている。そしてそれが存在を問い質している。存在の自己言及が創発している。言い換えれば、存在は自己自身を対象化するところの自己の意志(志向性)を継承している存在物としての自己双対としての思惟する人間を発現させるために、存在は完全対称から自発的に対称性を解体し自己展開をしている。これがこの世界での生成とその表象全体である。という見方もできるのである。自己分裂 ——— 自己展開 ——— 自己増殖 ——— 自己言及 ——— 自己超越。  
(非対称化) (対称化)

この自己循環を繰り返しているのではないか。

そして、”存在以外には存在は存在しない”。というこの超絶的形式は人間存在にとって理解の範囲を超えている。思惟はそこまでが限界である。ただ、その限界状況のなかで生物学的に存在を許容されている、という構図のなかに拘束されているという限界状況に居ることは驚くべきことである。この現況を勘案しない科学的世界定位は本質的なことを見失っている。なるほど科学も世界の世界が創造したものによる自己言及ではあるが、”存在驚愕”がない自己言及である。この存在驚愕はあらゆる世界定位の試金石である。

そこが思惟の限界であり、存在を定位することはできない。体系構築はそこでは意味をなさない。我々ほどんな権威ももってはいないのである。

4-028

4/16/2017

対称性の破れは新奇性、あるいは独特な偏向した固有性の特化へと向かっていく。

自己触媒と自己創出による回路系の確立により傾向性としての潜勢が新奇性として自己増殖しようとする。その回路が確立されるとそれが固定化され、その組織系を新奇性と確立系の相補関係のなかに巻き込んでいく。その回路による繰り返しのより更に傾向性としての新奇性、傾向性、潜勢性が濃縮されていく。この潜勢性は対称性を破ろうとするものであり、非対称化への志向性である。これはあらゆるレベルで起きる。そこには生起するプロセスの自己超越が起きている。これは大いなる謎ではある。素粒子レベルから生命系、宇宙系にまで拡張できる概念である。この志向性としての自発的対称性の破れは一面においてニーチェの謂う”権力への意志”の現代科学による翻訳と言えるかも知れない。

傾向性の濃縮化、潜在的傾向性の顕在化、これらが自己組織化ループのなかで実現していく。臨界値を突破した相転移と対称性の破れ、そして新奇性の発現。既存の確立系と新奇性との相克のプロセス。相転移で生じた新奇性の総和が相転移前の単純和の状態で潜在していたという考えは、単純な考えである。現代物理における力の大統一はそういうアプローチであるが、生命系においてはそう単純にはいかない。系と系外とのダイナミックな相互作用プロセスによる系自体の自己創出、自己超越が起きている、はずである。

対称性の破れを起こす志向性。新奇性という新たな固有化への潜勢、衝動、志向性。新たな相における構造化の志向性。これらとニーチェの”権力への意志”との同意性がうかがえる。新たな相への転移の志向性、新たな相のなかにおける構造化への志向性。これは自己創出への志向性と言うこともできる。複雑化、分岐化への志向性、つまり新たな固有化への志向性。現象論的にみればエントロピーの増大という概念でくくることはできるかも知れないが、そう単純なものではないと思う。

自己参照、宇宙参照、自己触媒、自己創発、自己超越、ハイパーサイクル回路系、自己組織化。これらは生物だけでなくあらゆるマイクロ、マクロ系において起きている謎である。

—

生物学的感覚から多くの恩恵を得ていると同時に、そのことの必然的な依存性からその感覚によって拘束されている。快・不快という生物学的な複雑系から発現する感情というものによって感覚は快の方向への志向性を有している。そこには複雑なダイナミクスが起きているはずである。快・不快という価値性は系の効用関数である。そしてその基準に沿った志向性により、豊穡な世界表象を創発することによって多大の恩恵を受けているが、その方向性からくる偏向が逆に多くの制約を課すのである。非対称化、自発的対称性の破れはそういうことを促進する。

—

常に自己認識を行いながら、生物学的枠組み、社会的枠組みのなかにいる自己を意識的あるいは無意識的に確認しながら、それらの枠組みのなかで常にいるという拘束性のなかで存在している。そして人間の思惟のほとんどはそれらの拘束性のなかのことに費される。フッサールの謂うエポケー(判断停止)による純粹直観経験によって、それらの拘束を除いた実質、実体を導出しようとするアプローチは実存意識を目覚めさせる。それらの拘束性を認識することによってのみ、それらの拘束性から自己を解放することができる。生のリアルな世界—内—存在としての実存の把握であり、思惟するこの主—客—分裂する人間存在は脱自的に超越をする。概念、論理、悟性の基底にある本質的な意味を露呈させる。

我々が思っている世界は我々が創ったものであることを知るようになる。我々が創った概念空間から創発させたものであることを。

世界の裸の現実には意味とか志向性というものは無いのであり、それは我々が創り出したものである。ただ、存在だけは超越性として形而上学的にあり、否定できない現実である。あらゆる虚構、虚偽を取り払って最後に残るのは存在である。我々の思惟が及ばない絶対的超越性とその形而上学的現実を我々に射影するところの根本構造。洗脳された我々には驚くべき現実が横たわっており、休みなく生起してくるなかに構造化され、そのなかに存在している。没価値、没意味の純粹存在のなかに全身浸っているという実存状況。

4-029

4/28/2017

世界は位相的である。

世界は、現実、は、位相的である。物理学という波動性とか、なにか基本的なものに還元される階層構造的なようなものではなく、根本的に厳正な意味において位相的なのである。生物学的起源である度量衡的概念に概念化されるものではなく、本質的に位相的なのである。

世界はもともと位相的なものである。度量衡的な概念は人間種の生物学的感官が有する形式を世界へ拡大外挿させたものである。人間が有する認識形式や思惟形式は根底から考えなおされねばならない。これらは人間特有のものであり、世界に適応すべく世界に寄り添ってきた存在としての固有の世界認識としての形式である。世界は度量衡的概念からは程遠い。人間特有の存在形式は、この世界における存在の必然性の顕れであり、根源的形式を根底に有する存在物が有する構造としての必然性ではある。

本質は、何もない、我々にとっては何の属性も有しない無であると思われる。我々は我々に映ずる様々な本質の顕れを抽出し強調し、そのなかでの関係を議論する。我々は無から様々に射影された像を対象化している。我々の直観的経験は既に本質から射影されているものであり、その先はより本質に近い領域は我々には、はかり知られることがない領域である。

世界は人間にとっては、意味空間という位相空間である。人間は意味によって世界を構成する。様々な生活のなかの意味によって内的世界を構成する。世界は我々によって構成された内的意味世界である。世界それ自体は意味を構成しない。意味自体が無いのである。無である。

エポケー(判断停止)し、存在が私の内面に顕れるに任せる、この操作を思えば二十歳の早い頃からやってきた。それはハイデッガーの著作に埋没していたからで、それに連なる現象学との関係からのことだと思われる。そのように現象学的直観経験を試行していた。しかしこれは余りうまくはいかなかった。空虚が残るだけであった。志向性が無くなると世界は無になるように感じられる。志向性のなかに意味が顕れてくるからだろうと思われる。

志向性ととも世界が顕れる。我々は意味を内在的に構成しているものであり、もともとは何も無い無色のものであり、まず本質が有りそれが縮退したものを志向性により開放するのとは違うのである。無に意味を付与しているのは我々である。「存在そのもの」というのは我々が内面的に構成、構築しているものである。我々の超越的構成から生起してくるものである。我々の統一統覚としての超越的意識が存在という概念を創出するのである。我々の思惟の有する形式、志向性という存在化構造との相関関係が生起する。完全な対称性に我々思惟する存在が対称性の破れを生起させる。そして世界に我々の所与の形式に沿う世界を射影させる。

そもそも何も無い無から、志向性を有する我々が意味を我々用に創りだしているだけである。世界にそもそも意味はないのである。意味は志向性の関連のなかで生起する。・・・我々は死を経験することはない。もともと何も無い何の意味ももっていない現実に対し、人間は対自としての世界(世界>宇宙)を対象化するなかで、自己のなかで意味とか価値とかを構成しているものであり、してきたのである。

生物学的な、快・不快がその構成の重要な契機になっており、その根底にはある。快・不快から派生する価値基準が、自発的に構築されて美意識を構成する。生物学的な感官とその統覚と意識によって自己内で自己にとって固有の対象を構成する。対象の我々に対して有する属性を材料にして人間流に構成する。

人間が有している概念は、人間にとっての人間の生物学的な認識形式や次元から構成されるものであるし、それのみによって構成せざるを得ないものである。自ら創った概念が織り成す概念空間のなかで人間は思惟し行動している。

拡大された感官としての数学という記号論理による知見によってその概念がより非生物学的なより抽象化された非度量衡的な位相的概念に包越されていく。ニーチェや現象論(フッサール)らの分析はそのことを導出している。

それらの地平を俯瞰するなかから、超越的な形而上学的な意味が人間のなかで発現してくる。存在に対する実存としての人間の自覚である。その意識に至って初めて自由を意識することができる。形而上学的現実世界における自由としての実存を意識することになる。それらを自己のうちに構成する。人間はあくまで生物学的であるが、同時にそのことを包越した存在であることを自覚するのである。

世界知に対する概念はより汎化され抽象化され位相的になり、存在はより深く現実的になる。この段階での視界は、概念、価値、快・不快、心理学的形式・・・・・・を超えて自由である。主-客-分裂したものがここで止揚されている。人間の世界における存在条件、存在形式としての生物学的なものは、形而上学的超越のなかに厳として存在している。自己内構成を超えて。

5-006

12/19/2016

現代物理学のパラダイムに対して。

様々な方程式群を見てきたが、直観的にこれらの方程式群が自然の、世界の根源を表現するには余りに  
 ざこちないのではないかと感じるのである。いずれも不完全でざこちなく不細工で、そこに美的な深い統一が  
 あるとは感じられないのである。世界表象の悟性にとって都合のよい部分を抜き出し、それを強調し、方程式化  
 した人間の内部構成の結果にしか思えないのである。

恣意的な強調や抽出、それを表すパラメータや仮定の仮定の基盤の上に立っている自己無矛盾な反証不能な  
 封鎖系内での論理式である風には見えぬのである。

統一理論にしてもまず既に発見されたものに対する帰納化があり、更に他の者が発見されたらそれらを受け入  
 れる余地を作っておいて、それらを取り込み統一化して理論モデルを構築するというやり方である。

そして根源的なものから演繹できるようにその都度統一理論を更新しながら帰納的にも収斂させようとする。

元来、科学的認識とはそのようなものである。

そして本質的には、我々の生物学的感覚から得られる直感的経験—志向的体験から我々の内部で構成された  
 度量衡的概念の間の相関関係を構築するものである。

< ストリング理論で解っていること >

- ・方程式として完全に明らかになったものはない。
- ・この理論の主要な方程式が、どういうものになるはずか、認められた案はない。完全な方程式が存在すること  
 の証明もない。

< 解っていることは、おおよその結果と下記の3種類の予想である。 >

1. 背景の時空の幾何学的構造は時間的に変化せず、宇宙定数はゼロである。

細かい計算ができるのは、9つの空間の次元のうち、いくつかはコンパクト化して丸まっていて、残りが平ら  
 という場合で、そういう背景で動き相互作用するストリングやブレーンについてである。

しかし、これらの理論は我々がいる世界に関して確立している事実とは一致しない。

大半は破れていない超対称性があり、それは現実世界では観測されていない。また、超対称性の対となる  
 相手が観測されていない。

2. マルダセナ予想に基づく理論では、宇宙定数が負となる空間でのストリング理論を一定の超対称性ゲージ  
 理論と結びつける。これらの理論は明示的に構築できず、特殊な高度に対称的な極端な場合以外は調べる  
 ことができない。

マルダセナ予想の最も強い意味のものが正しければ、ストリング理論はゲージ理論と同様になり、負の宇宙  
 定数をもった正確な記述は得られる、がしかし我々の宇宙の宇宙定数は観測結果から類推して正である。

3. 26次元の時空では、フェルミオンも超対称性もなくボソン・ストリングという理論があるが、この理論からはタキオン  
 が出てきて、これは無限大の式につながり、この理論が無矛盾ではないことを見せている。

まとめるとこうなる。

- ・式として立てることができていない理論と、証明できていない予想に依存している。
- ・背景となる時空で動くストリング理論は根本的な理論とはならない。  
 求められるのは、背景非依存であり、かつ非摂動的な理論である。
- ・QED, QCD は近似の手順を用いてしか明らかになっていない。これはストリング理論と同じ。
- ・量子場の理論と同様にストリング理論は、もっと根本的な理論が存在することを推測させる。
- ・力と粒子の広がりや、相互作用を記述する方程式群は、ストリングが時空を占める面積が最小になるように  
 伝播するという単純な条件から導かれている。
- ・一般相対性理論は背景非依存であり、時間空間の全体の幾何学的構造が、流動的で固定されていないが、  
 ストリング理論は時間的に変動しない空間という古典的な幾何学的構造を背景として動く。
- ・BHのエントロピーに関するブレーンの関係はごく特殊な極限BHに限られている。  
 結局ストリング理論の結果は、特殊なBHの量子幾何学について実際の記述を含んでいない。現実のBHでは  
 ない。
- ・物理学とは関係のない数学的構造物を関連づける予想を唱えているに過ぎない。  
 (コンパクト化された6次元の空間の幾何学的構造など)

新たな対称性を創造するために、自己分解し、そして自己を思考する自己双対を創発させるために生成し時性を与え自己組織化ダイナミクスを遂行する。そして自己双対の生成としての対称性を発現し己の双対を増殖させる。

それは有性生物の自己増殖と非常に共通するものをもっている。  
おそらく有性生物もマクロな宇宙創成のマイクロ版と言えるものだろう。  
そして生物学的形式はその自己双対の生成の下における必然性である。

人間種を含め生物はすべて無から発現し無に帰る。  
すべて眼に映るもの、聴こえるもの、すべてが宇宙的であり、一回性のリアリティであり、掛け替えのない経験である。  
私の探索では、シャルダン、ニーチェ、ヤスパース・・・等において同じ存在を経験した、ということである。  
汎宇宙的であり、且つ最も人間臭い因習的なところに踞れた。  
それを形而上学的に意識するものにとって最も具体的にその浄福は実現されているのである。

今、ここにおけるリアリティ。  
宇宙の生成のこの瞬間、世界一内一存在としての”ここ”において、存在がそれらの時間、空間、世界という概念を超えて確かに存在しているというこのリアリティ。  
時間という概念を包摂し、瞬間という今において時間が永遠性として停止している相と、空間が非局所性として、すべての空間内の各点が汎宇宙的な中心としてある現実が、その点において時間空間結合し生成のダイナミズムが生起している4次元的リアリティ。  
存在化することを許容されているから存在しているという形式認識を付与されたこの思惟する次元である人間にとって、ここに今世界が生起しているというリアルなビジョンを観るとこの脱時間、脱空間的な感性は、あらゆる代償が不可能な、またあらゆる交換が不可能な価値を有しており、それは存在が我々に与えた驚異的な暗号である。

主客分裂は、世界の形而上学的超越性をリアルに直観するための必然的なものであり、自己超越するために必要な意識の自発的対称性の破れである。  
現存在は超歴史的かつ超越的であることを直観的に経験させる。被投された実存が真に直接、存在を覚知する。そこには人間社会的な余地が入る隙間はないのである。存在意識が欠如した理論構築や権威やドグマが経験することのない世界が目の前に拡がっているのである。

完全対称の無から発現しているこの現象界に、それも無から発現した人間がその現象界を見ている。そして無に帰っていく。  
無から存在が生起し、その存在を対象化する意識を有する意識体が発現してきたことは、何か意味がありそうに思えるが、そこにはただ存在の志向性としての必然性があるだけなのである。  
だが、この意識体の発現で、自省し自己認識し、存在を意識する事態が発現したことは、自己反照による自己回帰としての自己循環が起きていることである。そこには自己超越の志向性が発現していると言うべきだろう。

存在、この概念は超越的だ。これ以上に明白で直接的でさらに意味不明な概念はない。そこに人間は意味を求めるが、それは通用しない。我々はそれを感じるということだけで十分だ。悟性、概念は通用しない。  
意味を求めること自体が、人間の勝手な妄想なのかも知れない。意味、本質などそもそも無いのかもしれない。  
それは人間内部で構成された効用関数的意味合いを有する人間のある志向性から由来するのかも知れない。  
我々は自己の世界一内面一空間での表象の位相空間から世界、存在を構成している。それらの概念や表象は我々自身が有する形式、機能、形質と情報接続できる範囲での世界の反映である。概念や意味は自己内で自己の有する制限内で無意識に構成され継承されてきたものである。

3). インフレーションへの疑問。

ビッグバンモデルの初期値問題として、地平線問題、一様性問題、平坦性問題がある。

インフレーションの問題点。

一つ目の問題。

インフレーションを起こすには”インフラトン”という粒子または場が必要であると考えられている(標準理論)が、質量が小さく、標準モデルでは他の粒子と相容れず、驚くほど小さいため検出しようがない。(ただし、インフラトンが不要な量子重力理論も考えられている。)

二つ目の問題。

宇宙スケールで指数関数的なインフレーションを起こすには、宇宙定数に関する途轍もなく大きな真空エネルギーを必要とするが、その大きさは現在の宇宙で観測されている真空エネルギーの臨界密度の約10の70乗である。現在の観測値は約10のマイナス29乗であり、10の100乗の差がある。

三つ目の問題。

地平線問題や平坦性問題を解決してくれるインフレーションを起こすには、ポテンシャルエネルギーが長時間にわたってほぼ一定でないといけない(スローロール)。長時間というのは初期宇宙の短時間に比べてという意味。ポテンシャルを平坦にするには不自然な微調整が必要になる。

四つ目の問題。

初期宇宙でインフレーションが起きる確率が非常に低い。インフレーションが起こる初期条件は生じにくい。最初のモデルでは非一様性が生じるが、CMBデータでは宇宙は比較的平滑である。改良型インフレーションはリンデによって提唱されたが、スタインハートがこの非一様性を改良した”新インフレーション”が提案したが(暗礁に乗り上げた)その欠陥を克服したもの。

初期宇宙で多くの小インフレーションが生じ、そのなかの一つが条件に合って我々の宇宙の初期値問題を解決したというもの。リンデの理論に出てくるキーワード。カオス、自己増殖、永久インフレーション・・・、机上の空論に近い、場当たりの感は否めない。

相対性理論の検証。

1. 光速一定への疑問。 光速と重力波の速度が同一へであることへの疑問。

光速可変理論(VSL) モファット。後にアルブレヒト、マゲージョ。

特殊相対論の対称性であるローレンツ不変性を破ることで、光速を変えるようにする。初期宇宙における不連続相転移によって光速が変化したものとする。またこの相転移がローレンツ対称性の自発的破れを引き起こすとする。物理量が臨界温度で相転移を起こしたとする。ビッグバン直後の初期宇宙では光速がとてつもなく大きかったが、その後急速に現在の値になったとする。”現在の光速の10の29乗倍”。ベビー宇宙で光速が遥かに大きかったとすれば、宇宙のあらゆるところに即座に光が届き、地平線問題を解決できるとともにCMB放射の温度の平滑性を説明できる。現在の光速になったことで平坦性問題を解決できる、とする。

電子はスピン角運動量  $\hbar/2$  をもつが、電子表面のスピードが光速の100倍以上になる。という考えに対しては？

バイメトリック重力理論。

計量テンソルを2個使う。一般相対論は時空の計量テンソルは1個。一つは物質と結びついていて、一つは時空の純粋な重力的性質を決める。ローゼン --> ベケンシュタイン --> ミルグロム --> モファット の歴史がある。

一般相対論と異なり光速と重力波の速度が異なるとして一方は変化するが一方は一定のままというシナリオ。実際は重力波の速さは、5~10%の精度でしか決定されていない。基準座標系は、一つはVSL座標系、ほかは重力波速度可変系(VSGW)。VSGW座標系では光速一定で重力波の速度が時間とともに変化する。インフレーションを起こす原理。初期宇宙において光速が一定だと重力波の速度がきわめて小さくなるため。VSL座標系の中で重力波の速さが一定であれば拘束はきわめて速くなる。インフラトンのポテンシャルエネルギーを微調整しなくてもインフレーション宇宙が導かれる。

10-005

宇宙論に関する私論。

2017-07

宇宙は”無”から始まった、時間概念も空間概念も無い、物質も無い”無”から始まった。というビレンケンのは考えは大方の理論家の賛同を得ているようだ。

現代物理学の最近の量子重力理論が説く無からの創生は概略次のようになる。  
時間、空間の概念が何もなく背景非依存で、かつ完全対称で共形不変な無から自己解体が始まった。  
最初の対称性の破れと相転移により、人間にとっての時間、空間という概念が発現した。

プランク質量  $10^{19} GeV$  よりも高いエネルギー領域では高階微分作用が優勢で、時空の揺らぎは背景時空  
独立な重力の量子論で記述できる。力学的エネルギースケールをプランクスケールより低い  $\Lambda_{QG} = 10^{17} GeV$   
の値を取ると、宇宙の進化は共形不変性が破れていく過程として表される。

そしてインフレーションから時空の相転移としてのビッグバンを経てフリードマン宇宙に移行する。

プランク質量  $M_{plank} \gg 10^{17} GeV$  の関係があるとインフレーション解が存在する。  
指数関数的な膨張を引き起こすプランクスケールによって”時間が力学的に生み出される”。それ以前は変化が  
極めて緩やかで、揺らぎの方が勝っていて”時間のない世界”だったと考えられる。

プランクスケール付近での共形不変性の破れは小さく、量子相関はべき級数的に振舞うが、 $10^{17} GeV$  での  
破れは対数関数的で共形不変性は急激に完全に壊れる。

量子重力の物理的な相関距離は、 $1/10^{17} GeV$  で与えられ、これより短いサイズの揺らぎは量子的で、  
長いサイズは古典的な揺らぎになる。エネルギーが  $1/10^{17} GeV$  より低くなれば時空の揺らぎは古典的になる。

アインシュタイン方程式のフリードマン解は不安定である。この解の周りの揺らぎ(摂動)を考えると、それは時間と  
ともに成長して解から大きくずれてしまう。しかし宇宙はフリードマン解で良く近似できるのは、”初期の揺らぎが  
極端に小さかった”ことを意味する。  
物質のエネルギー密度は、インフレーション解からズレ始めると生成される。物質のエネルギー密度の生成は  
共形異常に伴う、Wess-Zumino相互作用が、結合定数の増大と共に開くことから説明される。  
相転移時ではこの相互作用が非常に強くなって、重力場のスカラー自由度が急激に物質に転化してビッグバン  
が起こると考えられる。

最初の相転移により、無から、時間、空間、エネルギーという概念で表現される存在物が創発された。  
次々と対称性の破れと相転移を起こして物質(ボソン、フェルミオン)を創発した。これが現代の標準理論だ。  
ただ、我々には時間の本質も、空間の本質も、更に無と存在の本質と意味も解っていない。  
観測結果と経験則から推論するとそういう仮説が、信憑性のある仮説が成立している、ということである。  
潜在的なエネルギーの解放によって始原が存在化したというのには違和感がある。エネルギー自体は存在物  
であるから、それでは無からの創造にはならない。  
また揺らぎのエネルギーと言った場合のエネルギーは存在情報という情報的なものであると思われる。  
より包括的な観点から言えば、ホリスティックで位相的な”情報”から存在内に存在するすべての存在物は構成  
される必要があると私は考える。  
物理量は情報から構成される必要がある。情報は物質的というイメージがない必要がある。

無から創造されたということになれば、無には存在のあらゆる情報が縮退している必要がある。そして完全対称  
である必要がある。無とは存在物が何もないことであり、存在物が何も無いということは存在が無いということと  
同意である。  
我々が言えるのはただ、我々には知りえないところの”無から有(対称性が破れた状態)への情報の相転移”が  
あり、そこから存在化のダイナミクス、自己組織化へのダイナミクスが始動したのだ。ということしか言えない。

時間という概念も、空間という概念も何もない”無”から存在という背景形式とそのなかに存在物を創生した。  
この存在の顕現化は我々の概念で定位することはできない。  
存在は存在物が無ければ何の意味があるのか。存在は存在物が存在することによって成立する概念である。  
存在は存在物が無ければ存立し得ず、存在物は存在が無ければ存立し得ない。これは自己双対の関係にある。  
宇宙の創生の構図はおおまか以下のようなになる。  
世界は、存在 — 自発的対称性の破れ — 相転移 — 存在物の創生 — 自己組織化の濃縮化 —  
意識体の創発 — 意識の主客分裂 — 自己言及 — 自己循環。 という構図のなかに、或る志向性(意志)  
をもって駆動する自己組織化ダイナミクスである。

私は以下のように考えている。

無が自己言及、自己意識、自己認識のために、つまり自己超越への志向性(意志)のために、自己分裂し、時間、空間、物質が無という超対称性を破り、自己双対としての存在物を放下して存在を生起した。存在は、存在自身を対象化し得る思惟する自己双対の創発を志向する。自己超越する存在物の創発を志向する。そのために自発的に分裂し、対称性を破っていく。存在物は自己双対である存在を対象として意識する。そして自己をも意識することが可能な思惟する存在物(主-客-分裂した存在物)を創生する志向性(意志)をもって宇宙の自己組織化ダイナミクスを駆動する。

存在と整合的にある存在物のみが存在化を許容されているように見える。存在化されているということは存在の形式のもとで存在化が許容されていることと同意である。その故に存在化された存在物は存在を覚知できるのである。存在の覚知は意識が主-客-分裂した状態にある思惟体のみが成しえることである。その存在物は結果的に生物学的形式つまり自己組織化する開放型散逸系としての構造体を必要とした。そして現在生物が有しているあらゆる機能、構造、形態、・・・を自己保存、自己増殖、進化のために必要とした。

自己組織化する生命としての宇宙のなかに、自己組織化し意識し認識し存在と存在全体の意味を問う構造体が発現した。世界との接続を確立し情報交換する感官を自己創出し、意識を創発し、存在に対して言及する様々な概念を創出し、思惟し、自己言及する生命体を創発した。それは更に主-客-分裂し自己超越に向かっていく。世界は、この存在自身の自己超越という志向性(意志)のもとに展開しているように映る。主-客-分裂した意識が存在と存在物を認識する。このことが目的であるかのように、世界は生起し、自己展開し、自己組織化しているように見えるのである。

存在が許容した存在物である人間種は自己双対である存在と存在物(世界)を探求するが、これは言ってみれば世界の存在の自己言及である。存在の存在自身の自己超越のための自己組織化ダイナミクスが展開している過程を、我々は観ている。そういうなかでの存在物、存在は、我々の概念で表現すると、”位相的”であり、”情動的”であり、”ホロディック的”なのである。これは高度に抽象的なものの相転移し固有化し具体化したものなのであろうという予感を感じる。

我々の生物学的感官の情報、世界の情報を取捨選択し、変換された情報であり、純粹相としてのそれではない。変換された様々な情報から内部構成のなかで創生した概念、象徴、言語は人間種特有のものであり、その特殊な眼鏡で世界を見ている。その延長として物質、空間、時間という概念を自己内で構成している。包括的には上の三つの、”位相的”、”情動的”、”ホロディック的”は世界の存在の仕方表現している。これとて、我々生物学的人間種によって構成された特殊な射像であることは自明のことである。我々は顕在に対する我々人間種のなかにある形式、思考形式、機能性格によってイメージを造り上げる。世界は、この三つの、”位相的”、”情動的”、”ホロディック的”として我々に映る射像である。

世界は、脱-生物学的感官-形式である。我々の最も基本的な世界との接続形式が生物学的感官-形式なのであるが、そこからより、総合的、包括的な概念で世界を想定することはできるが、これは果てしなく後退していくのである。より抽象的、包括的な概念に収斂されてゆくのである。現在はその過程のなかにある。

我々の思惟は我々の生物学的感官の形式と、その拡大された感官としての形式をもつ記号論理でのみで思惟しなければならない限界状況のなかにある。上記の三つの、”位相的”、”情動的”、”ホロディック的”は、この現代の物理学の試行錯誤のなかから創発してきた概念である。AdS/CFT対応、エンタングルメントロピー、余剰次元、双対性、・・・等々の発見から由来する。これらは、奥深い内在秩序の象徴としての形式であり、本質の根源がこれらの形式に射影されていることを表している。それらの形式も双対関係で関連付いているものと思われる。世界の超越的形式を確信させるものである。

我々は世界の核心に、存在の核心に限りなく近づくであろうが、そこは思惟の特異点である。存在が全てを知られることは背理である。唯一無二の全一性としての存在が或るものに確定され規定されることは背理である。我々の思惟、思考、思想は我々のなかで構成された概念空間でのものである。しかるにその概念は生物学的起源のものである。そのため、最も基本的な余りに当たり前で意識にのぼることもない、時間、空間、次元、存在、・・・などを、より包括的、包越的に捉えなおす必要があるのである。

上の、三つの概念、”位相的”、”情動的”、”ホロディック的”は互いに複雑に絡み合った複雑性のなかから創発される、あるいは我々に射映される概念である。これらは、根源的には、すべて、”存在”の超絶性から射影されたものである。そのため世界定位の、あるいは自然科学の最も基本的な概念であるところの時間、空間、次元、そして最も思想的に根源的な概念である”存在”は、我々生物学的な思惟体には図り知れないことである。この存在構図は、我々の思惟、概念では解釈不能であり、そのこと自体が我々に眩暈を起す。我々は、想像を絶する高度な包越的抽象が自己展開する様を、この”4次元リアリティ”のなかで垣間見ている。そこには、人間的な”意味”、”なぜ”に対応するものは無いであろう。

## 第六部 宇宙論

存在していること。生物学的なサイバネチックス系として、自己組織化系として存在していること。あくまでも生物学的に存在していること、生物学的にのみ存在することを許容されている、ということ。これは実に驚くべきことである。我々には意識されないなかで、一時も休むことなく内部で生命維持がなされている。しかしそれは我々の意識にのぼることはない。我々はその上部構造としての概念空間のなかで生きている。実際には気の遠くなるような膨大な情報連携がかかされている。自己組織化ダイナミクスは我々の生物学的存在のみでなく宇宙自体において駆動している。我々はそういう構造、存在形式のなか存在している。そしてすべての存在物には存在が組み込まれている。驚異的現実である。

哲学的に重要なのは、実存と絶対意識である。4次元リアリティのなかでの絶対的意識である。そこには”絶対的歴史性”と”存在”が、絶対意識のなかで現出している。偉大な奇跡としての芸術である。実存はそのことの直接的体験である。人間ができ得る最大のことは、それらを絶対的歴史性として体感し、体験することであって、世界内の存在物の相互関係を厳密に定位し定義し体系化することではない。それらは職業学者に任せておけばよいのであって、実存はそれらの成果を吟味しながら取り入れて、さらにはそれらを踏み越えて自己超越するためにそれらの成果を利用するのである。

宇宙は、存在は、自己超越するために自発的に対称性を破り、相転移して自己組織化するように、思惟し存在を意識し、それを対象化して自己超越しようとする人間も同じことである。

ビレンケン”の”無からの創生”という言葉に関して。  
なぜ”無”からと言うのかというと、”存在を別の存在で説明しても、説明にならないから”というのが理由である。  
つまり唯一無二の存在が、別の存在によって定義されるのは背理だから、無からの創生としている、ということである。  
無にはあらゆる属性がない。そのため無に存在化した際のすべての属性が無に凝縮、縮退していたと考えることは背理である。無から有が創生されたというのも背理である。

始源に元々存在というものが無ければ背理である。宇宙は存在が変容したのである。さもなければ、全くこの存在次元とは接続不能な次元があり、そこを無とした場合にこの次元存在へ無から発現したのだ、とすることができるかもしれない。我々がいるこの存在とは全く接続不能な次元存在を想定しない限り存在の唯一無二性とは無矛盾にならない。あるいは、”無は存在しない”のであり、これは換言すれば、”存在しないことが存在する”と同意である。そこには存在がつねに無より優位であり存在が基準である。無は存在の一形式として存在するということになる。

我々は無から発現し、無に帰る。現代物理学では、宇宙も無から発現した、ということになっているが、宇宙も我々と同じように無に帰るのか？

無は概念がない属性がない、何もない想像上の産物である。存在が存在しているから無も存在しているというように単純に考えているからなのか。無は我々にとっては想像不能な思惟の極限である。

無は完全対称なゼロであり、あらゆる属性がないから概念化できない。だから表現不能のものである。

我々生物学的組織系は系外の世界の情報を取捨選択し、変換し、蓄積し、パターン化し、照合し、..そうやって概念を自己内で自己構成する。そのため概念はその出自からして偏向している。我々生物種に特有の色合いを帯びているのである。そういうなかにおいて概念によって無、存在を純粹客観として定義できないのである。我々は自己内の内面の”概念と言葉の空間”のなかで思惟し世界を対象化し、自己内で自己流に自己構成するのである。

存在を対象として意識し、覚知し認識する意識系が無ければ存在は存在し得ない。存在は存在を対象化し意識するものが存在しない限り成立しないことである。意識が対象化するには、主-客-分裂した、対称性が破れた意識系においてのみ可能である。

無から発現し無に帰ることができ、ある期間存在するが必然的に存在しなくなる。そういう存在でない限り存在を対象化し得ない。存在は消滅する(無化する)ものによってのみ覚知し意識できるのである。なぜなら、存在を覚知し対象化して意識できる主-客-分裂したものは生物学的にのみ存在が許容されているのであり、自己組織化し自己超越するために対称性の破れとしての主-客-分裂をなし得るものでなければならない。そして、それは生-死を必然的条件として存在化されているからである。

我々は生物学的な自己組織化系であり、死(アポトーシス)を条件に存在化しているといってもいい。そうであるからこそ存在という”こと”を意識し得る。無という完全対称から対称性の破れを経て、主-客-分裂という意識の対称性の破れがない限り、存在を意識することはないだろう。なぜ存在が存在するかは論理、因果性、...が意味をなさない超越的な謎であり暗号である。

すべては謎であり、必然であると同時に無限の任意性がある。唯一無二の存在が確定され定位されることは背理であるからである。

最も始源的な”有”として、完全対称で無限に自由度が縮退されている有の自己分裂前の状態。これを現代宇宙論では、”量子の揺らぎ”と言っているのであろう。それはホログラフィック的に、位相的に、情動的に、自己展開前の状態として潜在している。

そういう始源から存在の自己分裂、対称性の破れを自発的に或る志向性をもって創発した。その志向性とは宇宙の自己組織化であり、その情報の複雑系のなかから意識し、思惟し、自己組織化する存在の自己双対としての存在物を創出することである。

このことを意志した。自己双対による自己参照により自己循環を環結するというこの志向性を解放し自己分裂した。これが世界のダイナミクスの駆動の根源である。

意識の対象とならない存在には”意味”がないからである。

そのほかの構造的なこと、階層的構造とその連関や相対的世界定位、それらの対象はこの志向性のなかでの派生的なことであり、それらを創生し、それらを踏み台にして自己超越するための材料である。

時間があるわけではない。つねに現在があるだけである。人間が存在の自由度としての時間、空間を仮構したのである。時間が仮構されたように空間も生物学的感覚から外挿し仮構された可能性がある。

空間も或る始源から創発したものと考えられる。”位相的”、”ホログラフィック的”、”情動的”として顕れる始源的本質が射影している。そういった何かである。

## 第六部 宇宙論

これらの根源的なことで何を期待されているか？

絶対的意識による実存が成就することである。だから人間存在ではそれ以上のことはあり得ない。至上の存在形式の確認である。それが極限の到達点である。実存による存在確認。歴史的絶対性の確認。これのみである。

存在は現象生起の世界であり、存在物の無限の相関関係が複雑系として相関している情報の世界であり、位相的であると同時にホログラフィー的である。

これらの認識から実存覚醒が生起する。人間にとって最も貴重で価値のあることはこのことである。

唯一無二の絶対的超越性の存在のなかに顕在したという情報は存在情報として保存される。エネルギー保存則があるように、エネルギーのより包括的概念としての情報も保存される。さらにより包括的で抽象的概念である”絶対的歴史性”として存在している、という存在情報は保存されるのである。意識しよう意識しまいと。

99-001

7/12/2017

全体的概観。

我々の生物学的組織系の機能は、自己組織化されており、自治機能をもっている。その機能とシーケンスは自動化されていて自動プログラミングが実行されている。組織全体と各器官とその細胞群とネットワークの間ではボトムアップとトップダウンの情報連携が複雑な構造と機能のなかで巧妙に遂行され維持されている。新奇性としての情報は既にシステム化されている確立系の情報のなかへ取捨選択されて取り込まれ、それが記憶系とのディープラーニングにより学習され、データベース化され新たな確立系を蓄積してゆく。この果てしなく高度な情報ダイナミクスが駆動している。脳を中心とした制御系と情報蓄積系と読み出し系と照合・判断系が自動組織化のダイナミクスのなかで実現されている。この生物学的組織系は情報のサイバネテックスそのものである。

それらの組織系全体の情報処理と管理は自動化されていて、痛みや機能の故障が発生するとき以外は、我々の意識に昇ることはない。この自己組織化ダイナミクスは生存のため以外に、それらの組織系の機能の上部構造としての意識、思惟の推進はもちろんだが存在覚知の創発のために組織系の機能、構造を維持しているようにも見える。表に出ることなく上部構造の目的遂行のために組織系自身に意識されることなく裏方として一時も休むことなく最大限の強度をもった意志により遂行されているように感じられる。

生物である植物には動物のような脳という器官、部位があつて複雑に情報を処理しながら組織を制御するしているわけではないが、他の生命のように成長し、故障部位を修復し、自己保存し、自己継承し、自己増殖する志向性を有している。脳のように特にそれに特化した器官を有しているわけではないのにそれらの複雑な自己組織化が成されるのか。動物の脳に相当する或る機能が植物の中にあると思われる。脳という部位は無いが細胞間情報の集合によって情報交換し自己組織化していると考えざるを得ない。そこには同じように自己組織化という志向性が有るとみなさなければならぬ。各々の様々な情報のコミュニケーションによりそれらの機構が創発されていると考えるほうが妥当だろう。細胞の物理的機能の単純和の集合から成立している事象ではなさそうだ。細胞間情報の集合系が、意志、志向性をもち自身の組織系を制御し、反応し、情報の蓄積や更新などの様々な自己組織化と自治を行っていると考えたほうがいい。ここには部分の合計が全体ではない、ということを示唆している。物体としての部位がその機能を有しているのではなく、様々な情報の複雑な連携自体がホログラフィックな情報処理機能を創発していると考え方がよさそうだ。ここにも、世界の情動的、位相的、ホログラフィック的な面が垣間見られる。

この自己組織化の驚異的なメカニズムが有する志向性は何に向かつての志向性なのか？

この生物学的組織系は宇宙の自己組織化と同じ志向性と原理がそこで駆動しているものと私は考える。この宇宙の自己組織化ダイナミクスは究極的には、存在を覚知し意識し、存在を問い、世界を対象化し、存在をも対象化する存在を、自身の中に創出することであるように感じられる。

そのために自発的に対称性を破り、相転移するたびに新たな相を創出して急激な相変化を成してきた。この連続により自己を超越し続けているように感じられる。量子揺らぎの相転移から物質を創出し、クォーク、レプトン、ボソン・・・を創出し、宇宙の大規模構造を造り、膨大な宇宙時間を経て、原子、分子による生物学的機能を有する自己組織化系を創出し、そして意識の主客分裂という対称性の破れを通して、存在を意識化するサイバネテックス系としての我々人間種を創造した。それが人間種自身を存在化し構造化し構成してきた存在を対象化している。これは悟性による存在への自己言及である。

自然科学による自然、宇宙の探求や、存在の定義付けは宇宙そのものの根源である存在自身による自己言及である。世界を対象化しその仕組みや相関関係を探求する我々主体が有する概念、悟性はその圧倒的超越性と複雑性と見ざる意志に直面して、その限界を知るのである。この難破に突き当たることによって我々思惟する実存は存在覚醒し、存在を意識するようになる。自然科学の自己言及も宇宙の自己組織化の志向性も、すべては存在自身の自然(世界)を通しての自己自身による自己超越への志向性の顕れである。絶対意識のなかで成される実存意識の創生が目的であるかのように、世界はその強烈な志向性によって生成のダイナミクスを駆動しているように我々には映るのである。

そして生命は物質を従え、それらの上部構造としてあるのであり、生命という意識し、対象化し、思惟することが目的なのであり、4次元のリアリティのなかで存在を覚知することがその目的なのであり、世界はその志向性の下で生成駆動しているのであると思わざるを得ない。

空間が創発的な”情報”であると同じように、世界は”位相的、ホログラフィック的”である、そして宇宙が自己組織化を志向しているように生命も自己組織化を志向する。自己組織化するダイナミクスとその志向性は、存在を覚知し世界と存在を対象化し、存在を覚知しようとする思惟系が、存在のなかで自己創発するように駆動している。このようにして、存在は世界を通じて自己展開している。

実存として存在を実存が有する生物学的機構(存在が自己構成した)のもとに、この4次元のリアリティを絶対的意識のもとで絶対的歴史性を体感し経験すること。そして絶対的歴史性は時間という概念の根源であり、時間という人間の内部で構成された過去、現在、未来という概念としての時間ではなく、絶対的時間としての現在があるだけだということを認識することが実存にとって重要である。

そして存在を対象化するという、つまり存在が自発的に自己分裂し、その志向性のもとに自己展開しているところのダイナミズムは、存在の志向性の表象であり、存在自身がその自己双対である思惟し意識する存在物である人間種によって意識化され、対象化されることによって存在自身の意味を成就する。こういう自己超越が志向性の根底に存在する。存在のこういった意志、志向性のもとにその存在の地平形式が在り、存在物はそこに投入される。世界はそういう志向性に由来する構造と機構と形式の下に凝集され配位されている。ということの認識が重要である。自己循環する自己言及という機構を認識することを求められている。これは存在から求められているのではないか。

### <存在の背景独立性>

存在と存在物に世界の全ては二分できるが、その存在物は存在物の間の相関関係として様々な手法や概念を使って明らかにし定位することは原理的には可能である。このよりもっと普遍的な概念に還元するという作業は限りなく続けられるだろうが、必ず我々の悟性や概念が乗り越えられない限界に突き当たるのである。それは存在物は絶対的背景としての存在に背景依存している存在物だからである。背景としての絶対性としての存在自体が概念や悟性を超えて超越的であるからである。そして存在を背景とする存在物は存在の超越性を継承しているからである。

存在は背景非依存であり背景独立である。つまり自分自身が自分自身の背景である。この場合、存在物間のように相対的な相互関係によって定義できない。存在は唯一性であり背景独立であり、相対性ではなく絶対性である。だから存在は他の存在によって定義することは原理的にできない。存在を存在の外部から客観化して俯瞰することはできない。客観化する主観は存在しない領域から、つまり無から俯瞰しているのであり、無はつまり存在しないことが存在すると同意であり自己矛盾を抱えた概念である。存在を外部から客観的に俯瞰するということは、存在が存在しない無に主観である主体が存在することになり論理的には背理である。それは存在は論理化でき概念化できるという誤った科学の外挿から来る錯覚である。

しかし我々は存在が存在しないところの無からこの存在が存在するところに発現し、いずれ存在が存在しないところに帰入する存在である。無から一瞬の発光のように存在を横断するかのようである。そのように、存在は存在の内部のみからしか対象化することはできない。外部はそもそも存在しないのであるから外部から存在を対象化できない。そして存在は存在物によって定義できない。存在は存在物の存在の背景であると定義することしかできず、悟性、概念の通用する限界であり極限である。我々は存在物とその表象のみから存在という地平形式を予想できるのみである。だが我々の使う悟性、概念は存在の支配下の元で構築された、既に存在に着色されたものである。そういった混合相のなかで純粋の存在そのものを構想しようとするのは、構造的にも論理的な自己循環からも可能なこととは思われない。

我々が存在を対象化する際の意識は主客分裂を起こしている。存在の中にいて自己と自己を存立させている存在を対象化している。存在によって存在化されている存在物としての存在である思惟し意識する主客分裂したものが自己言及するという自己循環のなかにある。存在を対象化するという我々人間種の冒険は、存在によって存在化されている存在物である我々にとっては、まさに存在の自己分裂、自己言及である。自己分裂は我々の主客分裂の意識の中にも顕れている。

そして我々は存在に依存しているが存在は何ものにも依存しない背景独立であり、自身がすべてであり、自身の志向性が存在物である世界の全ての根源である。世界は存在の志向性そのものであり、他に依存するものがない存在の絶対的自存としての絶対的超越性の志向性そのものである。

存在は存在物が存在することによって我々の内部で構成できる概念である。(あるいは存在物が存在していることの表象としての象徴として成立する概念であるが、)。存在と存在物は双対であり、かつ自己双対である。我々は生物学的感官とその派生による概念によって世界を記述できるが、存在は我々のなかで構成されたあるいはそこから創発してくる抽象化された超越的な模式・構図化した地平形式である。時間と同じく存在も、我々の思惟し概念を作り出し構図を構成する機構のなかで内部構成されたものである。しかしこの存在という直接的に覚知できるものは何よりも現実的でありかつ最も重要な生の具体的なものであるが。

存在は存在物が無ければ、あるいは存在物の背景としてでなければ成立し得ず、時間は空間と同じく存在の背景が無ければ存在し得ない。だから時間、空間は存在物つまり存在の存在化の形式としてある。背景独立は存在以外にはない。背景独立としての時空が量子重力理論によって取りざたされているが、それはあくまで存在物としての時間空間の概念以前の存在物のことである。そこでは時間の概念も、空間の概念もない時空から生じたとするが、その根拠を結局は存在物に求めているのである。自然科学は存在物のあるいは存在物間の相互関係の関連性の定位であり、決して存在に言及することはない。自然科学の究極の還元先は、より包括的な概念で表現される存在物である。現在のところは、”位相的、情報的、ホログラフィー的”と呼ばれるものだ。しかしこれらは常に、より基本的な概念に還元される運命にある。

存在は、科学的手法や論理、概念が破綻する極限である。しかし最も根源的で現実的であり、全ての根拠である。背景独立の存在は、他のものによって説明できない。それ以上の探求や定位、定義はそこで止むのである。存在という概念は我々のなかで生まれた超越的概念、絶対的概念である。しかし具体性として存在している。それは我々が無から発現して存在に到来したものであり、存在による我々への存在覚醒としてのものである。それは我々が無から発現して無に帰すものとして、無から存在を経験しているから可能なのかも知れない。

そして我々は、存在という超越的地平形式に組み込まれた時空概念を超えた超越性としての存在物である。実存にとってでき得る最大のことは、悟性、概念、論理の深淵に立って、駆動する世界のダイナミズムと、その4次元的リアリティの脱時間性のなかで存在を体験、経験することである。そのことは超越的脱自としての自己超越である。

### <存在と志向性>

存在を存在の外部から見やることはできない。なぜなら、主観は存在の外に在ることになり存在しないからだ。それは背理である。内、外、境界はなく、全ては存在の内部に存在している。そして外部に在ることは、二つの存在を仮定していることになる。これも背理である。存在は唯一無二であるからだ。ただ一つしかないその内部においてすべてが在る。世界が複数あろうと、例え無限に在ろうと、それらの背景である存在は唯一無二の一つである。多世界宇宙のことがよく語られるが、それは特に問題はないだろう。世界は一つでありそれ以外が無いということは、存在と世界の一对以外の自由度がないことであり、存在の本質から考えられないからだ。存在は複数はない。存在は唯一であるが世界は無限でもかまわない。この論理を超えた現実のなかに被投されている。唯一であり他の存在と対は形成しえない唯一性の中にある。この超越的論理が現実の捉えがたい側面なのだ。

無は存在しないことが存在する、という意味であり、このように無は存在を基準に考えざるを得ない。存在は唯一的絶対性であり、他ということと多数ということとは存在しないのであるから、自身を定義するのに自身を媒介にしなければならない、という論理的な自己循環に陥り論理が難破する超越的境界、臨界である。存在を対自として対象化し意識できるのは、我々の内部で存在というものを構成できるからである。それは我々が無から発現して無に帰すものとして、無から存在を経験しているから可能なのかも知れない。

存在はそれ自体であり、存在以外のなにものによっても定義され説明されることがない。存在は大いなる謎であり、その謎と暗号のなかに我々のすべてが依存している、という驚くべき現実を我々は生きているのである。存在を対象化し意識するものが、我々にとって理解不能なかつ唯一無二の絶対性である存在の中に生起している、そして生物学的にも感情や思惟も、全てをその存在に依存しているということは驚くべきことである。存在が存在自身を対象化する思惟体を創生すべく世界が存在が駆動しているかのようだ。おそらくそうなのであろうと私は考える。

世界は我々の生物学的起源である概念からは程遠いものであるということを現代物理は示唆しているように思う。世界は位相的であり、情動的であり、ホログラフィック的であることが解り始めてきている。現代物理学と代数学、幾何学の予想として出てきている。世界の表象は、今後は更により包括的な概念から説明されるようになる。

超弦、M理論、ループ量子重力、さまざまな量子重力理論、トポロジー弦理論、格子行列模型、AdS/CFT対応、エンタングルメント・エントロピー、トポロジー幾何学、非可換幾何学、……等々。それらは我々の内部で構成されたものによる世界解釈であり、世界から生起した世界を継承した我々が、世界を解釈しているのであり、これは世界による世界の自己言及と同意である。世界の自発的対称性の破れから始まった分裂が、宇宙的時間のなかで存在を意識する思惟体の創発により、自身の存在を問い質し対象化するという世界の自己言及による自己循環が起きている。なんとも奇妙なことか。矛盾が無矛盾に自己完結しているのは存在の唯一無二の絶対性から来ている必然的なことである。

存在が不可思議なように、存在の下に存在化されている存在物(世界)も大いに不可思議なものである。それらの不可思議性と論理と概念を超えた(すり抜ける)絶対的必然としての自己超越が、まさに顕現しているのである。

”そこにあるのは存在の志向性(意志)のみである”。”世界はその意志が向かっていくところの全てである”。”世界は存在の志向性が自己展開するところの自己整合性、自己完結性としての必然性である”。それ以外にはないという自己完結している必然性の表象である。矛盾に思えるものは、”この唯一無二の絶対性の志向性から発するものの中では、すべてが無矛盾になっているのであり、そのように在るべくして在る必然性がただ、在るだけである”。相対的関連性の解釈からは存在は浮上してこない。むしろそれらの関連性を全て否定したところから浮上してくる。それらの世界の相関関係は志向性(意志)の結果であり、それ以外を想定すること自体が無意味な必然性が顕現しているだけである。存在はそれ自身の志向性の顕現としての表象として我々に覚知される。

主客分裂した意識は対象化に向かい、世界を相関関係から定位しようとするが、それは存在の志向性が自己自身を自己展開しているその様相であり、世界は志向性が向かっている世界事象であり、すべては自己完結している自己循環であり、”そこに在るのは唯一無二の絶対性の志向性が展開している必然としての顕現である”。

存在の志向性が自己無矛盾に自己展開しているダイナミズムが在るだけである。そして全ては自己創発的に生起する。生成への志向、自己超越への志向。自己超越のために自らが志向した自発的対称性の破れが形式的にも物質的にも意識的にも自己創発的に生起し駆動している。この存在の自己生成の志向性が世界の自己組織化としてのダイナミズムとして現れているのである。